

調査報告

# コロナ危機下の民俗祭礼 ： 奥三河花祭の現地調査

今野 元

## はじめに

「人間の尊厳と平和のための人文社会研究所」の三遠南信班（班長：柴田陽一准教授）は、9月15日から18日まで、北設楽郡東栄町の「とうえい健康の館」に滞在し、愛知県北設楽郡の現地調査を行った。調査項目は多岐に渡ったが、その一環として、筆者は「コロナ危機下の霜月神楽」と題する保存会関係者への聞き取り調査を実施した。インタビューを前に配布した趣旨説明は、以下の通りである。

### <調査の趣旨>

愛知県はまつり県であり、歴史のある民俗祭礼は大切な県の財産です。ところが新型コロナ・ウィルスが蔓延して以来、祭礼の前提である人間の輪が断ち切れ、開催が困難になっているように思われます。東海テレビの番組「祭人魂」も終了してしまいました。そこで「愛知県立大学人間の尊厳と平和のための人文社会研究所」では、民俗祭礼の当事者の皆さんに、コロナ危機による、あるいは危機以前からの祭礼の問題点を語って頂き、それをまとめて社会に伝え、人間の輪の回復を応援したいと考えております。

今回は北設楽郡を調査対象にするため、霜月神楽を中心にお話を伺いたいのですが、そのほかの行事（鹿討神事、田楽、盆踊り、白山祭など）についても併せて伺えますと有難く存じます。

### <質問項目>

ご多忙のところ誠に恐れ入りますが、以下の点につき、可能な限り具体的に伺いたいと存じます。聴取した内容は録音の上、保存させていただきます。文字資料があれば、お許し頂ける範囲で写真撮影をお許しいただきたく存じます。

なお調査内容は、研究所紀要『人文社会論叢』（2022年3月発刊）に掲載させていただきます。

1. 当集落の行事の起源について
2. 当集落の行事の特徴について
3. 当集落の行事にまつわる逸話について
4. 歌謡（うたぐら）の歌詞について
5. 開催場所の変遷について（宿花・宮花など）
6. 集落外の人間の行事での奉仕及びその度合いについて
7. 祭礼実施に関する財政的事情について

8. 祭祀主宰者（花太夫・宮人）の家系保全について
9. 他集落との交流及び協力の可能性について
10. 神社仏閣との関係について
11. 祭事奉仕者の精進潔斎の実施状況について
12. 開催時間の変化について
13. 祭具の管理・更新について
14. 舞の稽古の実施状況について
15. 見学客について
16. 女子の行事への参加及びその度合いについて
17. コロナ危機対応に関する議論について
18. コロナ危機後の再開について
19. その他の問題点について

柴田准教授の東栄町役場、設楽町役場との交渉が功を奏して、このたび東栄町教育委員会、古戸花祭（振草系）及び津具花祭（大入系）の保存会へのインタビューが実現した。本稿はその内容を、参加者一同の同意を得て公表するものである。ご参加頂いた奥三河の関係者の皆さま、教員各位に御礼申し上げます。また、野村仁子講師には、2と3の音声起こしにご協力頂いた点でも感謝したい。写真は、全て今野の写真機で撮影したものである。なお、現地では「花祭」、「花祭り」、「花まつり」などの表記が混在しているが、本稿では引用部以外は「花祭」で一本化した。

#### 1. 東栄町教育委員会（9月15日13時～15時・於東栄町教育委員会）

報告者：青山章氏（教育委員会社会教育係長）・伊藤正人氏（同主事）

参加者：柴田陽一准教授（人文地理学・地理思想史）・上川通夫教授（日本中世史）・竹中克行教授（地理学・ランドスケープ研究）・中西啓太准教授（日本近現代史・地方史）・野村仁子兼任講師（宗教学）・今野元教授（ドイツ政治史・政治思想史）（以上愛知県立大学）

今野：花祭は東栄町の、北設楽郡の重要行事として盛んに行われてきたわけですが、近年は人材集めの困難などが言われ、平成31年に布川花祭が休止に至りました。そこで更にコロナ危機がやってきたわけですが、花祭はどのような状況になったのでしょうか。

伊藤：近年の花祭の実施状況についてお話しします。花祭は、東栄町が北設楽郡では一番多くて11地区、開催順に小林地区、御園地区、東菌目地区、月地区、足込地区、中在家（なかんぜき）地区、中設楽地区、河内（こうち）地区、古戸（ふっと）地区、下粟代地区、布川地区に花祭保存会があります。設楽町では1地区（津具地区）、豊根村では3地区（坂宇場地区、下黒川地区、上黒川地区）が継承されております<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 花祭の先駆的研究に、早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）がある。この著作（前編8-10頁）には、愛知県北設楽郡での花祭の開催場所として、以下の20箇所

花祭の歴史をご紹介しますと、鎌倉時代から継承されていると伝わっています。もともと古戸の白山祭が起源だと言われ、修験者の祭礼だったと言われています。白山祭は現在、12月第2週に行われますが、そこから花祭が伝播していったといわれております。花祭が現在の形態になったのは、江戸時代と見られています。民俗学者の早川孝太郎は、花祭を水系によって、振草（ふりくさ）系と大入（おおにゅう）系とに分けました。大入系が東菌目、御園で、小林は大川内系と呼ばれており、その他は振草系と呼ばれています。平成31年3月を最後に布川は中止となり、令和元年度は10地区が花祭を行いました。

令和2年度は感染症の影響を受けて、一度お盆前に保存会長さんたちに、今後のことについての意見交換をして頂きました。運営は各保存会に委ねられているのですが、やはり足並みを揃えたいというお気持ちもあり、この事態は未曾有のことで、こちらも近隣市町村の祭礼の実施情報をお伝えしました。令和2年度は、だいたいの保存会が神事のみということで、榊鬼など代表的な舞だけ保存会内で行い、一般公開はしないということで広報をし、関係者以外の方の参観はお断りすることにしました。

布川花祭の休止を機に、これまでなかった意見交換会を毎年持つようになりました。花祭の保存会はおおむね地区の方で占められているのですが、地区外に出ている



教育委員会インタビューの光景（左より上川、伊藤、青山の各氏）

が列記されている（一部誤記訂正）。12月2日：御殿（みどの）村大字中設楽。12月7日：御殿村大字月。12月10日：振草村大字古戸・三輪村大字奈根（なね）。12月12日：振草村大字小林。12月中期（日不整）：本郷町大字中在家。1月2日：豊根村大字大立（おおたて）・園村大字御園・御殿村大字布川。1月3日：振草村大字下栗代・豊根村大字坂宇場。1月4日：園村大字足込。1月5日：園村大字東菌目・豊根村大字上黒川。1月7日：豊根村大字下黒川。1月10日：豊根村大字古真立（こまたて）。1月12日：豊根村大字三沢。1月16日：豊根村大字間黒（まくろ）。1月中期（日不整）：園村大字大入。旧暦1月15日：下津具村大字下津具。加えて、旧暦11月8日に静岡県磐田郡佐久間村大字山室（やんぼろ）、旧暦11月14日に静岡県磐田郡浦川村大字川合、新暦1月5日に長野県下伊那郡神原村大字大川内でも花祭の開催があったという。このうち、山室は佐久間ダムに水没したが、現在でも川合（現・浜松市）では「花の舞」（10月最終土曜日）が、大川内（現・天龍村）では霜月神楽（向方お潔め祭り（1月3日）・坂部冬祭（1月4日）・大河内池大神社例祭（1月5日））が存続している。

今日では、早川が言及していない花祭もある。豊橋市西幸町の御幸神社では、佐久間ダム建設で故郷が水没し、豊根村から移住した人々によって、「豊橋花祭」（1月4日）が行われている。また長野県飯田市では、複数の神社で「遠山の霜月祭」（12月初旬・中旬）が開催されている。東京都東久留米市では、御園花祭と協力関係にある「東京花祭保存会」により、「東京花祭」（12月第2土曜日）が開催されている。

方を含む場合もあります。河内や中在家など、地区を越えて保存会を形成し、運営体制を敷いているところもあります。全部にいえることなのですが、地区全体が高齢化しているため、60・70代の方がどの保存会でも運営の中心になっているというところが課題かと思っています。現在は女性の会員の方もいらっしゃいます。会員は、20人から30人あたりが多いと思われます。協力してくれる外部団体があることもあり、例えば小林地区では名古屋大学の学生さんと10年以上前から連携して、花宿の設営から接待の手伝い、保存継承のための花祭次第の作成などを共同で行っています。御園地区は、25年ほど前から東京都東久留米市の団体「東京花祭」と交流があり、互いに世代を超えて人的支援を行っています。東菌目地区には、プロの和太鼓集団である「志多ら」（しだら）がありまして、そのメンバーが花祭の運営にも深くかかわっています。保存会によっては、そのような外部団体が運営にかかわるところもあります。

次は保存会の課題です。どこの保存会でも会員の高齢化がネックになっています。少子高齢化で、1人1人のご負担が重くなってきたというご意見をよく伺います。もともと花祭は夜通しやる祭祀になっておりましたが、負担軽減のために、東栄町内でも一日で完結させる工夫をしているところもあります。例えば小林、中在家、東菌目は、朝早い段階から始めて、夜には終わる形にしています。その保存会長さんに伺うと、夜通しの祭礼を1日にするには抵抗があったそうなのですが、特に高齢者や女性には負担軽減になったと仰っていました。あるいは夜通し実施する場合でも、夜の飲食提供を止めたり、飲食を弁当にしたり、という形で負担軽減を図っているといえます。また少子化の影響で、子供たちの担い手が減り、他地区やその地区にかかわりのある、町外に出してしまった都会の在住者に参加を呼び掛けるということが行われています。花宿も、屋内も屋外もあるのですが、衣装ともども、長年の使用で痛みが激しく、なかなか修繕ができていない状況です。また霜月神楽というように、かつては旧暦11月、新暦の正月付近でやっていたのが、徐々に開催日を拡散し、協力を得られやすい日に移動するという工夫がなされました。更に、かつては男子だけ、長男だけが舞うという風習だったのが、いまでは全地区で女性が入って舞うようになっています。



愛知県立大学オープン・キャンパスにおける中設楽花祭（神道花）の出花（令和元年8月7日）

技術伝承への取り組みですが、草鞋（わらじ）、藁草履（わらぞうり）の作り手が、講習会を開いてもなかなか増えないのですが、明日いらっしゃる古戸の佐々木経人さんは、10年以上前から草鞋作りの継承者育成に尽力されていて、そうした試みが全地区に広がっていけばよいのではと思っています。また花祭をPRするという意味で、出花という出張講演があり、中設楽地区がほかの場所に出向いて、花祭の魅力を知ってもらう試みをしています。

令和3年度も、7月に保存会の皆さんの会合がありました。いまずぐに休止を考えて

いるところはないのですが、開催方法を模索しているという状況です。毎年やっているからこそ継承できていたのに、このように1回、2回と休止しますと、皆さんの心が花祭から離れてしまい、そこからまたやろうという気持ちを起こすのが難しいということを、どこの保存会の方々も仰っています。今後10年以上継承していく上で、この2年間の休止は大きいかと思っています。ただこれまでの開催方法とは別に、新しい開催方法を模索するというのを、プラスに捉える保存会もありました。

今野：鹿討神事、白山祭、御神楽なども、軒並み休止だったのでしょうか。

伊藤：盆行事は昨年、今年とも全地区休止になりました。鹿討神事は、小林、月、布川は休止だったのですが、古戸は地区の皆さんで行うということになりました。白山祭も、令和2年は実施したのですが、地区の皆さんだけということでした。例年通り、皆さんが山に登って見学できるというわけには行きませんでした。

今野：コロナ危機で人々の気持ちが離れていくのが怖いということですが、もし外部の人間が支援をできるとしたら、どのようなことがあると思われますか。

伊藤：どこの保存会も支援者の方が大勢いらっしゃるのですが、一番大きなものは人的支援であり、それは舞の継承だけではなくて、当日のお手伝いだと思われます。また通常の花祭ですと、「お見舞」という形での寄付も助けになりますが、一番重要なものは人的支援です。ただ各地区の事情については、私から一概にはご紹介できません。

今野：花祭では、よく3000円ほどの花見舞をお渡しするのですが、5000円とか、もっと多く出すべきということでしょうか。

伊藤：そこはお気持ちなので、幾らがいいということではなく、花祭の会場に見に来て下さるということが、大事ではないかと思います。

今野：財政的に赤字であるというような問題はあるのでしょうか。

伊藤：財政状況については、各保存会の内部でされていることなので、お答えできないというのが実情です。

青山：1つの保存会に対し毎年50000円という補助金を出しておりまして、保存会長さんからも増額の要請は来ていないので、収支はひとまず合っているのではないかと思います。また道具の修理、会場の修繕に関しては、県の補助などがありまして、その都度申請して頂くことになっています。

今野：ちなみに東栄町では、コロナ・ウィルスの感染者はどの程度出ているのでしょうか。それが町の生活に大きな影響を及ぼしているのでしょうか。

伊藤：通算では町内で10人となり、人口当たりでは愛知県でトップになってしまいますが、クラスターなどは発生しておらず、施設使用を20時までとし、学校の休校・時間差通学などはしていません。

柴田：開催時期が1週ずつずれているように思うのですが、こうなったのは各保存会で調整をした結果なのですか。

伊藤：11月3日に「東栄フェスティバル」（東栄町内外の文化活動を披露する祭典）があり、そのあと小林、御園と[花祭を]始めるのですが、各保存会の事情によるので、これは相互に調整をしたというわけではありません。ただ一般に、正月ごろ

に集まる傾向があったのが、のちに前倒しをして、11月頃に開催するようになったということです。

柴田：小林、御園を皮切りにというのは、昔からの慣習なのですか。

伊藤：特にそういうわけではないと思います。

青山：保存会同士の調整はしていないと思います。ただ正月に集まる傾向があったのが、やはり正月はえらいということで、互いに開催日をずらしていったと思うのですが。

伊藤：ちなみに設楽町の津具、豊根村の下黒川、上黒川も正月の開催です。

柴田：正月に集まっていたのを拡散するようになったのは、いつごろからなのでしょうか。

今野：正月に集まっていたのは、太陽暦の1月が旧暦の霜月に当たるということなのでしょう。それとも人手を集めやすかったということでしょうか。

青山：出身者が戻り、人手を集めやすいことが大きいと思います。

伊藤：『東栄町誌』に記述がありますが、小林地区は、いま11月開催ですが、かつては12月12日で、昭和43年から1月4日になって、平成5年から現在の日程になっています。御園地区は、もともとは正月2・3日だったのが、現在の日程（11月）になった時期は不明ということです。月地区も、いま11月22・23日にやっているのですが、詳細は不明です。足込地区はもともと正月なのですが、昭和50年代くらいから。河内地区も同様です。中設楽地区は平成8年から、中在家地区は昭和50年くらいからということです<sup>2</sup>。

今野：少し違う観点からなのですが、近年はオーバーツーリズム批判というのがありまして、集落の仲間内の行事が観光化するのを懸念する向きもあるように思います。外部の人間に守って欲しいマナーなどもあるのでしょうか。

伊藤：撮影する際に舞の妨げにならないように、ということはあるように思います。どの保存会さんも、地区の皆さんが楽しむということに重きを置いておられますが、外部の観客への思いについては一概には言えないところです。

青山：最近は少なくなりましたが、観光バスで大勢がやってきて、保存会は御飯やお酒で接待したのですが、花見舞は団体でまとめて3000円ということがあったようです。もちろん気持ちの問題なのですが、そうすると少し残念でしょう。また舞が大事なので、舞の妨げになるのは困るということでしょうか。舞人はあちこちを移動するので、それが分かっている人はよけられるのですが、分からない観客が舞人とぶつかるということがありました。

今野：集落同士の協力関係について、平成30年3月に布川花祭を拝見した際に、各地区の伝統があるため、協力というのは難しい、合併という話もあるけれども、そうするくらいなら止めるというお話を現地の方がされていて、1年後に実際に止められたのが印象的でした。

青山：同じ系統でも、微妙に所作が異なってきているので、合併という話はあまり出てこないように思います。

---

<sup>2</sup> 『東栄町誌・伝統芸能編』（平成16年）、471頁。

伊藤：人的な協力はあります。振草系で古戸、布川、中設楽で榊鬼が似ていると思いますし、かつて起源に当たる古戸で舞が一時休止した際には、伝播先の布川から教えてもらったことがあったらしいです。中在家も明治になって足込から受容しました。しかしいまは、もう合併とかいう話は出ることはありません。

青山：昔は各地区に子供がおったので、そのなかで人材を登用していたのですが、いまはそのようなことはいっておられません。東栄町に本郷、下川といった地域がありますが、ここは花祭がない地域なので、そこの子供が出向いて舞うということがあります。複数の地区で舞う子供もいます。東栄町全体で、人材を融通するというようになっていきます。

竹中：本郷、下川といった中心の集落には花祭の伝統がなく、山間の小さな集落にそれがあるということですが、それはなぜなのでしょう。修験者たちによってもたらされたということと関係があるのでしょうか。それともそれぞれの地域の生活と関係があるのでしょうか。

伊藤：本郷、下川に伝播していない理由は勉強不足で分からないのですが、江戸時代に東栄町は振草郷と呼ばれていまして、各村々があったところに花祭がある形です。水系に沿って村々があり、そこに伝播したと推測できるかと思います。

青山：本郷、下川は新しい町で、花祭のある地域には昔から人が住んでいたということではないかと思いますが、確かなことは分かりません。

竹中：本郷という地名はいつからあるのでしょうか。

上川：中世からあるという可能性はありますね。行政的に、郡のなかの郷の中心地という意味だったのだと思います。

竹中：中心部の成立が意外に新しいのかもしれないなという風には、直感的に思うのですが。

伊藤：江戸時代の頃、振草郷も入町村といって、本郷のなかに月の飛び地、中設楽の飛び地があって、そういうことも関係しているのかなと思います。

竹中：振草系、大入系についても一度確認したいのですが。＜中略＞西の方にある小林はどうなるのですか。

伊藤：小林は振草系、大入系には入りません。舞が独特で、鬼の面も沢山あり、江戸時代に2つの村が合併したという伝承があります。ここだけ舞が異なるので、早川孝太郎の分類では「大河内系」と呼ばれています。御園と東菌目、そして廃村になった大入が、大入系となります。大入花祭の史料は、花祭会館に展示されており、国指定の登録有形民俗文化財となっております。

竹中：豊根村の花祭はどの系列に分類されますか。＜中略＞

今野：大入系だったと思います。

竹中：伝播のルートに関係しているのですね。

伊藤：早川孝太郎は、水系に沿って分類しています。

竹中：神事のなかで水が重視されるということはありませんか。

伊藤：滝祓いというのが祭祀の始めにあり、水が大切な役割を果たしております<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> 早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）、前編17頁。



<中略>

上川：花祭を何回か見学させて頂いたのですが、一度見るとまた来たいなと思うところがあるように思います。さて、『東栄町誌』や『愛知県史』にも多くの史料が収められてきましたが、まだ調査が進んでいる史料はありますか。

伊藤：『東栄町誌』の刊行は終了しましたが。

上川：一時期名古屋大学の研究者が入って調査が行われていたようですね。足込の慶泉寺に行ったのですが、室町時代の600巻の『大般若経』があると、あとで聞いて驚きました。もう調査の余地はないのかなと思います。花太夫の所作に関することは秘密だったりするわけですが、そのあたりの調査の余地がまだあるのかなと思いました。

伊藤：花祭関係の史料は、花祭会館に集められております。榊鬼の所作に関してなどです。また布川で江戸時代から代々花太夫を継承されてきた尾林さんのところに、陰陽道に関わる文書が残っており、名古屋大学に関わりのある先生方が、昨年調査に入りました。

上川：もし機会があれば、県大生を沢山連れてきて調査し、合わせて花祭を支えるように、指導ができればと思います。

<中略>

青島：花祭会館には、各地区の映像資料もありますので、ご覧ください。



インタビュー参加者：左より上川、伊藤、青山、柴田、竹中、中西、野村の各氏（今野撮影）

## 2. 古戸花祭保存会（9月16日13時～15時・於東栄町教育委員会）

参加者：佐々木経人氏（つねと・花太夫<sup>4</sup>）／青山章氏・伊藤正人氏（以上東栄町教育委員会）／柴田陽一准教授・中西啓太准教授・野村仁子講師・今野元教授（以上愛知県立大学）

今野：本日は沢山の品物をもってきて頂きまして。

<sup>4</sup>花太夫（太夫、宮太夫、花禰宜、禰宜、鍵取、幣取とも）は祭祀の主宰者であるが、集落の人間が務める役職で、（国家神道体制下の）神職とは別箇である（早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）、前編414-421頁）。



佐々木：沢山宿題を頂きましたから。＜中略＞あげられるものですが、まずは資料です。宿花の一覧<sup>5</sup>、盆は、今年のははねこみだけやりました<sup>6</sup>。これは花のうたぐらと唱えごとです<sup>7</sup>。これは私がフェスティバルで解説したものです<sup>8</sup>。これは、花祭及び白山祭で我々が用意するものです。これは菰[こも]です。我々が座ったり、役舞の時に使ったり、これが180センチと90センチで畳1畳分ですね。本当は藁がもっと長いとよいのですが、いまのは少し短いから、



白山祭の「高嶺祭」(平成28年12月13日・右端は花太夫・佐々木氏)

ら、舞っているとすぐ毛羽立ってきて、見苦しいんですけどやむを得ない。いまあるものを使うしかありません。



権現山(白山)の白山神社(平成28年12月13日)

#### 行事の起源で

すが、延喜年間[901-923年]に山伏が加賀の白山から、菊理媛尊というそこにお祀りしてある神の御分身を持ってきたといえます。その方たちが集団でみえて、古戸から見ると北西方向、大変見晴らしのよい山へその御分身を祀られたと言われているのですが、本当かどうか、見たことがあるわけではありません。修験者ですので、飛んだり跳ねたり、祈禱、病気平癒を主に生業としていたと思います。修験者が飛んだり跳ねたりする様が、村人に伝わって、色々な変遷を経て、いまの花祭の形になったのではないかとされています。

行事の起源ですが、延喜年間[901-923年]に山伏が加賀の白山から、菊理媛尊というそこにお祀りしてある神の御分身を持ってきたといえます。その方たちが集団でみえて、古戸から見ると北西方向、大変見晴らしのよい山へその御分身を祀られたと言われているのですが、本当かどうか、見たことがあるわけではありません。修験者ですので、飛んだり跳ねたり、祈禱、病気平癒を主に生業としていたと思います。修験者が飛んだり跳ねたりする様が、村人に伝わって、色々な変遷を経て、いまの花祭の形になったのではないかとされています。

標高が700メートルぐらいの頂上に白山神社があるのですが、もともとは白山権現、いわゆる権現様と言われておりました。非常に急ですので、



権現山(白山)のケーブル(平成28年12月13日)

我々が歩いて、1回休んで30分ぐらいかな、3時間、4時間かけて登ってくる方も見えになります。道幅も狭いし、本当に急なところで



白山祭の接待(平成28年12月13日)

<sup>5</sup> 『古戸花祭宿組廻り記録 大正七年十二月十日始』。

<sup>6</sup> 古戸盆踊保存会『古戸盆踊唄』(年代不詳)。同『盆踊小唄』(昭和53年)。

<sup>7</sup> 伊藤勝蔵『花祭神入詞』(昭和16年)。伊藤国治『奥三河の奇祭 無形文化財 古戸の花祭り 歌ぐ楽集』(昭和61年)。

<sup>8</sup> 東栄町古戸花祭り保存会『花祭り』(年代不詳)。

すので、難儀をすることは間違いないです。今は荷物運び用のケーブルがついて、そのお陰で結構助かっています。以前はいろんな荷物や太鼓まで背負いあげ、煮炊きまで上でやりましたので、いまでこそ、ぼた餅、握り飯のちょっと大きい小豆が入っているものを、下で握ってケーブルで上げるんですが、お汁物は上で作りますので、当然のことながら人夫も上がるし、係りの者も上がるということです。

古戸の花祭は振草系です。いま大千瀬川がここの役場の前をずっと流れていますが、大千瀬川はもともと振草川と言われていまして、振草系というのはその川の流れに沿って伝わったものです。もう一方は大入の系統。大入川は、豊根の方、佐久間町寄りの方から流れてきますが、それにそって伝わってきたのが大入系というわけです。舞そのものや拍子に若干の違いがあって、明らかに違う系列の舞をしています。[県立大学で出花を行った]中設楽の花[花祭のこと]は、振草系なんですよ。ところがここは明治の初め頃、神道花にしました。鬼面の角を切り、呼び方も榊鬼ではなく、素戔鳴尊など神道の系統にしてしまったという特殊な所ではあるのですが、他は大入系と振草系という分け方ができるのではないかと考えております。

花そのものはそういう流れですが、盆はそういったものはよく分かりません。『盆行事』に多少は書いてあるとは思いますが<sup>9</sup>、盆歌そのものはどこの部落に行ってもそんなに変わりがないのですが、節や踊りは当然違います。ここ2年程は盆踊りができませんでした。手踊りはやったけれども。手踊りは5種類ぐらいあり、それぞれ特徴がある踊り方なのですが、残念なことに音頭出しがだんだんおらんようになってきた。我々の先輩がこうやる、ああやると言ったのを見聞きしながら覚えておったものが、なかなか最近の若い人たちは、あんまり覚えようとしなない。そういう関わりというのが、あまりなくなっているのかなと思います。盆でも笛を吹きますし、花でも笛が出ます。ですので、それも覚えて欲しいということで、伝承教室をやったりしているのですが、なかなか伝承は難しいものかなと。形があって無いようなものですから。草鞋もそうです。ここ3年前ぐらいから、古戸の伝承教室をやろうじゃないかということで、2人はこれ[草鞋]を作れるようになりました。おかげで助かっています。ここまでするのに大体1時間。ですがここまでするのには、まず藁がないとダメ、それから藁を叩いて、柔らかくして、縄をなって、形を整えながら、編み上げていくということなのですが、ただよその部落も年寄りがいなくなった、自分たちでやれる所が少なくなったということで、あっちこっちに頼まれ教えに行くが、それだけで済んじゃう。やろうという意欲、その時は意欲があるが、次の日になると「ここが分からん、あそこが分からん」となって、非常に残念なのですが、今は数名しか[作れる人がいない]。年寄りには、昔はこればかり作っていたので、作れないことはないが、最近作ってないから分からんという方が、非常に多くなってしまっています。感覚的に長さや幅を決めたりするので、作るたびに幅や長さが変わってきたりということがあっても、履いてしまえば一緒ですので、そう苦しなくても大丈夫ですよと[いうわけです]。これぐらいの大きさが普通です。24センチぐらいかな。

<sup>9</sup> 東栄町文化遺産活用実行委員会『東栄町の盆行事：ハネコミ・手踊り・大念仏調査報告書』（平成28年）、14-22、181-186頁。

草鞋も藁草履も、指が出ますものですから、普通の靴と違って、小さく作っても十分履ける。1回だけ、ある部落に頼まれて、30センチのものを作った。とんでもない大きさ、化け物みたいな。これ[長さが24センチの草鞋]は幅が9センチですが、30センチ[の草鞋]となると12センチの幅にしないとできないんですね。そんなになくても、25、26センチでも間に合ったんじゃないかと思っていますが、そういう注文もあります。ネットで頼むところが多くなってきた。将来的には、焼き付けみたいなもので作ってしまうのかなと思っています。一番多い時で120足ぐらい作りました。絶対必要なものなので、覚えておいて損はないから覚えて下さいと言うのですが、なかなか覚えてくれない。残念ながら草鞋が主になって草履が作れる人がいない。これから教えてくれないとならんのかなと。これ[菰]も樽に巻いたものを使ったり、私が作ったのを何年も使ったりしている。覚えていて損はないと思うのですが、なかなか意欲がある人がいなくて残念です。



佐々木氏が制作し本学に寄贈したもの：  
上より菰、草鞋、草履

今野：こっち[草鞋]とこっち[草履]で別のものですか。

佐々木：草鞋と草履。これ[草鞋]は舞う時に履く、こっち[草履]はお手伝いなどが履くのです。実際に花で衣装つけて舞うのはこっち。子供は子供用に作って。大・中・小ぐらい。いまの子供は非常に足が大きいから、ある程度の年齢になると、これ(大)で十分。何回も使うものではないから、1回履けば、大体大人だとそれで

ダメ。子供だと、本当は新しいものに変えてあげると良い。記念だから親御さんが欲しがったり。余程小さい子だと2回使えるのかなと思うのですが、1回だけのものだから、結局は50、60必要。作ってくれる人がいるからいいが、いないと1人だけではちょっと大変な仕事で根気が必要です。それと藁の調達が必要になってきます。

行事の特徴ですが、花祭だけに関する  
と、舞は古戸には敵わないということは、



古戸花祭の伴鬼(平成31年1月3日)

どこの部落でも言っています。ある部落、特に子供の舞は、普通は同じ舞のなかに3つずつある、例えば三つ舞でも扇・剣・ヤ



古戸の延福山普光寺(曹洞宗)(令和3年9月15日)

チ[木剣]と、持ち物が違う。ところが子供がいないから、2つを1つにしてしまう。途中で持ち物を変えて舞うというところがだいぶ増えてきました。うちはそんなことなしに、続けてでも舞わせる、舞わしても取りものは変わらずに、初めから終わりまでやっているということです。その辺もきちんとやっておるつもりです。特に稽古はかなり厳しいです。ここからここまで抜いてということは、大人の相当熟練したものの場合はそうですが、そうじゃない舞については、初めから終わりまで通し稽古です。7時から始めて、遅い時は明るく日の明るくなるぐらいまでやったことがあります。それも幾晩も。5日間寝っこなして出勤したということもあります。最近では、それでも2時、3時かな、稽古が終わるのが。正月も稽古をやるんですよ、1日に。古戸[花祭]の場合は1月の2日、3日です。1日の昼から。それは役鬼の稽古。役鬼になると松明で火を見せる稽古も必要となってきます。でも、正月だから昼間一杯呼ばれて出てきて、ゴロゴロになっている様な例もありますが、そのくらい熱心に、出てこれるだけいいのかなということです。皆さん真剣になって取り組んで頂いているのと同時に、省くことの無いようにやっておるつもりです。我々の拝んだりという所作も、昔から我々が教えていただいたもの、ここを省いた方が良いとかは一切なしで、やらせてもらっております。

行事にまつわる逸話について。いまでは全く無いですが、盆行事の際に朝、普光寺の本堂で大勢寝ていたということは、よく聞きました。ずっと踊りを通しでやっておって、家に帰るのも面倒くさいから。和尚さんに、「いい加減帰れ」と言われて、やっと帰る状況だったといえます。最近では全くそんなことはない。特に去年や今年はコロナで、今年は10日も13、14日も雨降りでした。跳ね込みだけは、外でできない時は、本堂でやらせてもらうのです。

うたぐらについて。盆歌も花の歌もありますが。舞の種類は、舞上が3つ、三つ舞が3つ、四つ舞も3つ、それは持ち物が違うから。それと市の舞と湯ばやし。鬼が3つ出るけれども、拍子が違うのが2つ。おつるひやら。それと翁とひの祢宜。それと獅子。それぞれ若干の違いがあるのですが、翁とヒノネギは一緒です。あとは、普通の舞だと3つずつ。扇と木の刀[ヤチ]とカネの刀[剣]。うたぐらは、一番簡単なのは、二拍子だとこのような感じ<sup>10</sup>。

式ならば式よと申すいつとても

すると今度、返しが、

いつとても式よは神の一重給わな 式よは神の一重給わな おもしろ

これが普通の舞上の拍子です。これが三つ舞になると、こうなります。

<sup>10</sup> 佐々木氏の口ずさんだうたぐらは『奥三河の奇祭 無形文化財 古戸の花祭り 歌ぐ楽集』（佐々木経人氏寄贈・人文社会研究所蔵）により再現した。



式ならば一式よと申すヨー サーいつとても ひとつでも式よは神ノヤー 一重給わな 式よは神の一重給わな  
エーヨーオーオーン

これが三拍子です。四つ舞だと、

式ならば式よと申すいつとても ひとつでも式よは神の一重給わな 式よは・・・

太鼓で1つ拍子が入るのです。

湯ばやしになると、またうたぐらが違います。

湯囃しの舞い出る姿花かよ 花かよ花と差し出て姿見ら  
れる 花と差し出て姿見られる おもしろ

太鼓もそれぞれ拍子が違います。細かく分けると、8つか9つあります。

今野：歌詞は同じのままでも、リズムを変えることによって、かなり違うものに聞こえてくるのですね。

佐々木：そうそう。賑やかくなったりするのです。



インタビューで笛を披露する佐々木氏

湯囃しの舞い出る・・・

盆歌はまた盆歌で違いがあります。やってみましょう。道行き[太鼓を叩いて歩いて行く]ということで、お寺さんから出たり、蘭塔場から出る時。

< 笛の演奏や歌の披露数曲 >

[盆行事も]8月10日と13日とで踊り、節、歌が違う。14日もまた歌が変わってくる。これが、言ってみればうたぐらになるのかなと。

場所の変遷ですが、山田[初信]さんという方が記録したものを私が写したものをお渡ししました<sup>11</sup>。昭和19年までは宿花(やどばな)、つまりそれぞれの家を回って、[昭和]20年から宮花(みやばな)、つまり八幡神社の下のところのみでやるよ

<sup>11</sup> 『古戸花祭宿組廻り記録 大正七年十二月十日始』は、「平田屋 山田初信」氏が  
大正7年より記録したものを、平成七年の同氏の引越しの際に、同氏及び佐々木経  
人氏が平成8年5月27日に転記しまとめ、平成26年9月17日に追記したものだと  
いう。以下に引用したように、「昭和天皇大病につき」と書かれていることから、祭  
礼当日にその都度書いたものではなく、時期を置いて書いた部分があることが分かる  
(祭礼当時の記載なら「昭和天皇」ではなく「天皇」、「天皇陛下」などと記載され  
るはず)。

うになって、日にちも12月10日だった。昭和31年から1月5日になって、昭和36年に1月2日になって、いまでも続いているわけです。今年[令和3年1月2日]の花は軽くやって、拝むことは外から中から拝んで、我々宮人の仕事ですので、舞は半日ぐらいで済ませて。結局あとは一杯やると。12月10日なんてよくやれたなど。何もかも百姓[仕事]も終わった時期だったのかなと思うんですけど。

普通の家でやるとなると、どこの家でも土間があったのですが、かなりの土間がないとできなかつたのと、全部の部屋を開け放しにしてもらうようにお願いします。自分たちの居場所がないぐらいです。それと汚いですが、昔はどこでも小便をしたりできる状態だったらしいです。我々が覚えているのは、「クラブ」[宮花の会場]です。

昭和29、28年頃の岩波の花祭の記録映画に私が映っています<sup>12</sup>。何回も何回もやらされた記憶があります。「僕たち、あそこから走ってきて」と何度も言われました。やらせがやたら多かったですね。当時は同時録音ができなかつたので、音と映像が狂っておる。私は元々のフィルムももってきて、大事にとってあります。場所的には広がったです。いまでもかなり広い場所でやっております。ともかく人は相変わらず、その当時から多かったですね。特に正月2日・3日になってから、人は確かにすごいです。この日程がちょうどいい時期なのかなと思います。

昭和天皇が危ないとなった時[昭和64年]には、休みました<sup>13</sup>。私は当時すでに宮人の一員だったのですが、お宮でお祓いをしてだけで終わりました。正月に皆やることがないから、外に出てウロウロしていました。「何やるね」、「何やるね」といって。

今野：それは、自粛されたということですか。

佐々木：そうですね。完全に舞は止めたのです。

今野：では花祭を止めたのは、今回コロナで初めて止めたというわけではなくて、天皇御不例の時にもそうだったと。

---

<sup>12</sup> 早川孝太郎（監修）／愛知県北設楽郡町村長会（企画）「奥三河の花祭」（岩波映画製作所、昭和28・29年）。東栄町古戸・御園花祭の記録。愛知県図書館で視聴可能。

<sup>13</sup> 『古戸花祭宿組廻り記録 大正七年十二月十日始』には「昭和六十四年一月二日 昭和天皇大病につき略式にて催行する（神事のみ）」「昭和六十四年一月七日 昭和天皇崩去 一月八日 平成と改元される」との記載がある。だが同書によれば、「大正天皇崩去」（大正15年12月25日）の際には、その直前（12月10・11日）に花祭を実施しているので、天皇の重篤な病の際に花祭を中止するというのは確固たる習慣ではないようである。



佐々木：そうです。ただやった部落もあったみたいですが。今年は、もう[一最初に開催する]小林の花祭が止めだそうです。それに右に倣えだと、止めんならんかもしれないけど、2年続けて止めるのはどうかなと思います。私としては、是非やりたい



白山祭の「住吉様」(平成28年12月13日・舞人は花太夫・佐々木氏)

ちでお祭りをして。お宮さんはお宮さんの方で担当してもらって、大体ヨーイドンで、私らの舞、住吉の舞をやります。ここの本殿があって、その隣に住吉さんの祠があって、本殿で「高天原に」ってやってる時に、うちらは住吉さんでドンドコドンドコとやるわけです。ちょうど同じぐらい、神事は1時間、私たちの舞も1時間かかるのです。

今野：[拝殿内の神事と拝殿外の舞とが]同時並行というのが面白いですね。

佐々木：「あんたらは、あんたらでやりなさいよ。私らは、私らでやるで」という感覚ですね。係が全く違うということです。[白山祭では]白山に登った時に、[花祭と]全く同じように舞庭を作るんですよ。釜だけ

など。こんなことはあってはならないことだと思うんですが。私が宮人になったのが42歳で、それからずっとやっています。今年76歳なので、34、5年になるのかな。1回だけ、ヘルニアで腰痛があって白山に登らなかったのですが、あとは欠かさず登っています。[白山祭り]で山上でやることは花祭と同じで、あっちでお祭りをして、こっ



白山神社本殿の神事(「住吉様」の隣で同時並行開催)(平成28年12月13日)



白山祭の「聖様」(平成28年12月13日・聖堂で誦経するのは花太夫・佐々木氏)



白山祭の舞庭(平成28年12月13日・太鼓を叩くのは花太夫・佐々木氏)

はないんですね。穴を掘って火を焚く。あとの飾り付けは舞庭と同じように。もちろん笛も太鼓も全く一緒。舞そのものはそんなにな

い。全部やるにしても4つ。お珠の舞がメインです。見物客はそれを見に来るんだけど、あっという間に、10分ぐらいで終わっちゃう。菊理媛尊を祀った時にお珠を持ってきたらしく、それは錦の帛紗に包んである。ずっしり重いからたぶん石じゃないかな、粘土で石を固めて、錦の帛紗に包んであるのかなど。それを捧げるということで、息のかからないように[榊の葉を銜えて]舞う。お宮の横の宝物庫にそれが置いてあって、朝行って拝み出して、神官が背負って上がって、本殿に入れてある。舞う用意ができると、神官さんが下げ渡してくれるのですが、また返す時は神官さんに返して。それが我々のメインになってきます。朝6時に集合。お珠を出すのは5時半。6時に集合して寒いから30分ぐらい火に当たって、それから登って行って、ちょうど日の出の7時ちょっと前に着いて、それから荷物が上がってくるのを待って、飾り付けをして、外回りをして「できたよ」というと、皆一緒に拝んで上がってくる。ただ神社ですけれども、聖堂（ひじりどう）とあるように、そこだけ仏式で、和尚さん[普光寺住職]が拝んでくれたり、我々が般若心経を唱えたりしてお参りするのです。かなり前だと思うのですが、我々が知らない時に、大般若をやったと言われます。馬が登ったとか。当時、農耕馬や軍馬の飼育が盛んだったと。かなり急なところですので、危険だったと思うのですが、いまのような狭い道ではなく、もう少し広い道だったと思います。

花祭の財政的な事情について。去年[令和2年度]はたまたま[コロナ危機]で大したことをやっていないので、これが一昨年[令和元年度]の会計報告です。繰越金が結構あるものですから、実際に使ったのは350万円です。けれども補助金を、ポーラ文化振興財団[公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団]から50万円もらって、114万円で衣装を作りました。それを差し引くと、240万ぐらい経費としてかかったことになります。実際収入を見てみると、50万円を除くと、320万円だから同じぐらいですね。繰越金が320万だから、トントンになっちゃうな。お見舞いといって、いわゆるご奉納があります。それが200万円です。皆さんから頂くお金が。あげてくれるはあげてくれるけど、かかる金も結構あります。

今野：全支出が350万円ということですね。

佐々木：そのなかで、この年だけですが衣装代100万円。衣装代を除いた支出が240万円です。毎年240万ぐらいお金がかかっているということです。

今野：結構大規模なものですね。

佐々木：別に派手なことをやっているわけではないし、皆さんからあげてもらってお金が200万円あるわけで、それをちょうど使い切れてしまうということかな。飲んだり食ったりも多いけどね。

今野：かかっているお金は振る舞いのお金であるとか。

佐々木：そうですね。あとは会場費。

今野：古戸集会所は使用料がかかるんですか。

佐々木：電気代などかかりますので、使用料は25万円です。

今野：集会所は[東栄]町のものでしょうか。

佐々木：[東栄]町のものなのですが、古戸で管理しています。

今野：財政的な観点から、いま大きな困難があるわけではないということですか。

佐々木：くれるお金は、大体毎年あの人はいくらぐらいかなと見当がつくし、[花見舞は総額で]大体 200 万円ぐらいだと見当がつく。ただ、今年やる場合に、去年やらなかった分があがってくると一番嬉しいです。心配なのがコロナで、あんまり密になると問題です。花祭は、ともかく密なお祭りですから。

祭祀主宰者については、特に家系的には世襲とかはないです。

今野：江戸時代にはあったみたいですね。

佐々木：そうですね。

今野：明治初年に廃されたということですか<sup>14</sup>。

佐々木：最近、私らになってからはそんなのはないですね。ただ見ておって、「おい、あそこを今度指名しとけよ」と。結局、区の人選ですので、宮人は4年任期なんですよ。だいたいずっと続けてやる。他の役をもらっていても、続けざるを得ない。1回止めちゃうと、また一から覚え直しですから。沢山切るもの、紙細工など準備するものがあって、忘れると大変です。ずっとやっても、忘れる時がある。いま宮人は6人なのですが、ほとんどずっと継続でやってくれている。私が酉年生まれで、ここの教育長は私より一回り下の酉年生まれ。そのもう一回り下の酉年生まれの人に続けてもらいたいなど。12ぐらい離れて、トントントンと続いていくのが流れるにいいのかなと思います。

布川という部落はいま中止していますが、あそこは世襲です。月も世襲。ですが、実際には[主宰者が]こっちにいないんですね。花祭の時だけ[戻ってくる]。普段から付き合いがあればいいのですが、そうでないとどうしても、花の時だけやって来てということになってしまう。やっぱりこの人が適任だなと思う人たちに、上手く繋げていくような形が、一番理想的だと思います。

よその部落との交流・協力というのはあまりないな。協力してくれなくても、お見舞いを出してくれれば、他はいいよということですね。強いて言えば、こういうもの[草鞋]を「作っておくれ」と頼まれる。そういう協力はあります。来て、これやって欲しい、あれやって欲しいというのはほとんどない。古戸の場合は、ボランティアというか、ほとんどの男の人が何らかの関わりを持っている。我々のような仕事だとか、世話人や部屋番に就いていない者については、時間を設定して出てきてもらう。ほとんどの方に協力して頂いている。要は、お見舞いを貼ったり、掃除をしたり、舞の邪魔になるようなものを下げたり、火の番をしたりということ、全員に協力して頂いているのが実情です。

神社仏閣との関係について。盆の行事は当然ありますが、花に関しては、仏様とは特別関わりがないですね。

今野：八幡神社とは？

太夫：神社も、花については特にはないですね。

今野：では[神様に]御渡り頂くという程度ですね。

---

<sup>14</sup> かつて古戸には、下、折、浅井、寺脇、日向、日蔭、川合の小字に7戸の宮人屋敷があったという（早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）、前編428頁）。

佐々木：宮渡りはありまして、また〔花祭の道具を管理する〕宝物庫そのものが神社の横にあります。ただそれも、神社の担当ではなく、我々が取り仕切っている状態です。



古戸の八幡神社（令和3年9月15日）

今野：花祭が非常に面白いのは、完全に住民主体で、神主さんとかは関与しないですね。

佐々木：それは全くないですね。小林は神社と関係あるかな。

今野：確かに烏帽子を被った方が出てきますね。

佐々木：あれは我々でいうと花太夫。あそこは世襲です。御園は、神道花ではないが、花太夫の清水さんがたまたま神官です。古戸の場合は、お宮だ、お寺だというのは、深い関わりがないです。

今野：では、八幡神社の御神体そのものが渡御してくるのではなくて。

佐々木：ないですね。面など主要な道具を運ぶときに、それを「宮渡し」というだけです。

今野：神社の隣にあった白い蔵ですか。鳩が向かい合った紋がついていますね。

佐々木：花のものも入っているし、神社のものも入っている。宝物庫という呼び方をしています。衣装や太鼓や面など、一式全部が入っています。

精進潔斎について<sup>15</sup>。四つ足はやめて欲しいとっています。

今野：どのくらいの期間ですか。

佐々木：花に入ったら。稽古からだから〔12月〕25日から。そんな程度ですね。四つ足は慎めということですね。

今野：別に住むとか。

佐々木：それはないですね。〔設楽町の〕田峯〔2月11・12日の田峯田楽・田峯歌舞伎〕に行くともっと厳格に、食事は自分だけという具合にや



古戸八幡神社横の「宝物庫」  
（令和3年9月15日）



古戸集会所前の看板（平成31年1月3日）

<sup>15</sup> 以前は、花の舞以外の参加者が稽古中に家庭と関係を断ち、一定の空間で厳格な統制を受けたといい、振草系の某村では、抜け出して家庭に一旦帰った者が、不浄のため災難を招いたと批判されたという（早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）、前編80頁）。



っています<sup>16</sup>。私は「竹本文」という義太夫の芸名を頂いて、田峯にも参加しているのです。

今野：男性が調理したものを、男性だけで食べるということですね。

佐々木：そうですね。自分で炊いて自分で食べてという精進潔斎はありますが、田峯は花じゃなくて観音様のお祭りですよ。その時はよく言われましたけど。古戸にはそういう関わりはないですね。

開催時間は、いまは舞の始まりは[夕方]6時にきちっとしています。従って、それまでに我々が全ての祭祀を終えて、ヨーイドンで6時に始まります。他所に行くと、バラバラなんですよ、7時になったり8時になったり。いつまで経っても始まらないなという時がありますけど。「いい加減に出てこいよ」とヤジを飛ばしていますが。古戸はおかげで6時にはパッと始められるようにしてありますので、大体時間が読めるんですね。昔は7時からで、1時間ずれているが、これを目安にみなさんが来ます。御願花といって、願掛けをする舞をやって欲しいと、あるいは自分たちで舞うで、この時間だけはちょっとずれるということはあるけども、普通の舞だけであれば、ほとんどこれでいってしまいます。別にどっか抜くとかもなく、これで十分行けます。



古戸花祭の神座（平成31年1月3日）

今野：別の集落だと、徹夜でやるのが厳しいので、朝から晩まで1日で収めるってことをやっていますが。

佐々木：小林がそうですね。

今野：古戸はそういうことは考えないということですか。

佐々木：古戸は2日の夕方から、もちろん準備は2日の朝から準備をして、我々が外回りからずっとお祈りをしてきて、部屋の中に入

ってお祈りして我々の仕事が終わって、ご飯を頂いて、「よし6時、ヨーイドン」で始まる。それは毎年間違いなくできています。昔のように御願花が10とか15とかはないので。願掛けで「大病したから良くなるように」、「歳がここまできたから、まだまだ長生きしたいな」というのが15や20あると、とんでもないことになりますが、今はよくあっても10かな。それも全部やるわけではない。舞う子と願を掛ける人の願いを「ここまでやって欲しい」とか、「これ以上やらなくていいよ」とかいうことになりますので。自由に時間を延ばしたり短くしたりできるので、時間的にそんなに変化はないです。大体、翌日3日に家に帰って、遅い夕ご飯が食べられるかなという時間で、終わるようになりました。前はそんな状態ではなかったです。フラフラになって家に帰って、ご飯も食べずに寝るということもありましたが、最近はそのようなことはないですね。

[道具の]管理と更新ですが、管理は部屋番が担当しています。宝物庫に全て入れてあります。更新については、衣装が一番痛みやすい。いま頼んであるのは、鬼の赤

<sup>16</sup> 『設楽町誌 教育・文化編』（平成16年）、201-202頁。

い衣装で、あれをあげてもらおうように頼んでいます。いま子供さんたちが大きくなって、去年補助金を頂いてひとまわり大きいのを作りました。100 何万かかっています。痛み具合を見ながら徐々に更新していくことです。いずれにしても金がかかりますので、補助金は目当てになってくるかなと。私が去年申請したのは103 万円で、これはかかった額そのままでしたが、電話がかかってきて、「[補助金を出せるのは]半分だね」と言われ、「せめて70 万くらい頂戴よ」と交渉したけれど、ダメでした。5、6 年前に、鹿討神事について講演をやってほしいと国学院大学に頼まれて、それがたまたまポーラの講演だったわけです。その時に理事長さんに、うちの方もなんとかしたいな、頼むねという話の流れから、なんとかなるかなと思ったのですが、そんな虫のいい話はなかったです。

柴田：衣装はどういう業者に頼まれるのですか。

佐々木：豊橋の衣装屋さんで頼んだのですが、そこではやっとなんと言われたのですが、ただその前の古い衣装を持っていったら、「これは、うちで作ったもんだで、作らざるをえんね」ということで作ってくれました。ああいう特殊なものは、7 色ぐらい使っておりますので、なかなかやるところがない。2 色か3 色ぐらいなら、簡単に引き受けてくれるのですが。これから困りますよね、ああいう衣装屋さんがなくなってくると。かといって、ボロボロになっておるのでやるわけにはいかんし。当然更新は必要になってきますし。業者もそうだが、金も心配です。鬼はいいんです、真赤や青い衣装で1 色だから。他のものは何色も使っていますので。

柴田：形や色というのは、もう全て指定して作ってもらうのですか。

佐々木：そうそう。この通りで、一回り大きくしてもらったり、何寸大きくして欲しいとかいう指定をして作ってもらいます。

今野：豊橋は鬼祭などもありますし、そういう文化が残っているから、まだいいですけども。どこでもお願いできるようなことではないですね。

佐々木：舞の稽古は、12 月25 日からずっと通しでやって、1 日休むかな。12 月の最後の土曜日と日曜日にやる。今年やるとすると、25 日と26 日で稽古をやって、1 日休んで28 日、29 日、30 日でやって、鬼やなんかの稽古が1 日、というパターンになるかな。

今野：パート、パートでちょっとずつ稽古をして・・・。

佐々木：いや、通しです。

今野：通しを何回もやるのですか。

佐々木：25 日、26 日で通しをやるのですね。あともずっと通しで。

今野：総稽古を何回もやるのですか。

佐々木：そうです。でないと体力的に持つかどうか、舞つとる者も、そういう自覚がないと困りますよね。

今野：総稽古を何回もやると、当日までに疲れてしまうということはないのですか。

佐々木：そんなことはない、慣れてくると。上手になって褒めてやると、余計舞うようになるのです。

今野：総稽古を何回もやるというのは、すごいですね。

佐々木：見学者については、どういう趣旨の質問ですか。



今野：これはどういうことかという、集落によっては、集落のお祭りだからあまり見学者は歓迎しないとか、カメラマン間のトラブルとか、カメラマンが舞の邪魔になっているとか、そういう事情で、見学者を歓迎しないところもあるようなのです。古戸の場合は、見学者についてどのようにお考えなのかなと思ひまして。

佐々木：それはないですね、全く。ただ、確かにカメラマンは増えてきました。庭燈（せいと）番は、本当は暖をとるのと、今では豆炭か練炭が多くなってきたが、昔は焚き火をくべていたので、それを燃えやすいようにする。それと庭燈ですので、舞子



古戸花祭の焚火と豆炭（平成31年1月3日）

の邪魔をしないように管理しなければなりません。全く花を知らない者は、ここが空いているからとぼっと入って行くと、舞子がそこに飛んでくる可能性があります。そういう者の番と、2通りあるんですが。それらがきっちと管理しています。それと、太鼓の前に立たれてしまうと、結局太鼓と舞子の息が合っていないと、舞いにくいし、叩きにくいし、笛も合わんしということで、できるだけ前は開けてもらう。そういう役目もしとって

もらっているんで、特に大きいトラブルはないし、見学者についても、毎年来とる者はそれなりに心得ておって、まあ酔っ払いの中にはおって、警察沙汰になったこともあります。最近ではあんまり聞かないですね。古戸の場合はない。東菌目かな、入れないように、舞庭の周りを囲ったところもあります。それでも皆入って行くよ、邪魔しない限りで。

今野：津具の花祭だと、土俵みたいところで舞うので、結局客席と隔絶していて、皆が群れにくい感じになっているんですね。見やすいのですが。

佐々木：11月3日の花祭フェスティバル[東栄フェスティバル]で一番初めにやった時は、土俵だった。高いところですよ。駆け上がっていきただけけれども、引っ張られて落とされたりしたことは覚えています。遠くから見る分にはいいけれども、やっぱり平らな座敷でやって、平らなところで皆が同じようにできるのが理想的かなと。花祭フェスティバルは、これよりちょっと高いかな。今年は中止に決まっていますが、そこでは交代交代で、花祭の団体が出てきてやる。そこはちょっと高いです。そんなにワーワー言うっていうのは、湯ばやしで湯をかける時ぐらい。他はじっとして、見とってという感じですね。

今野：花見舞を納める方も多いと思うんですが、金額をもうちょっと貰った方がいいとかそういうのはありますか。

佐々木：そういうことはないですね。一応貰った端から封を開けて、[壁の誰からいくらもらったという]ビラを貼ります。それに対して「おい、少ないじゃないか」と言ったことはないですね。

今野：もちろん言うことはないでしょうが、本音は・・・。

佐々木：何となく[会所の]なかにおる者と、多いとか、少ないとか言うことはあるかもしれないですが。

女の子の件について。はっきり覚えてはおらんですが、昔は男ばかりだったのですが、いま50代になっているかつての女の子が舞いたいと言った時からだから、だいぶ前から女の子が加わっています。前は、女の子はダメでした。唯一女の子が舞えたのは、お宮で、初午で願を掛ける時と、15歳で願ばたき[元服式]をやる時でした<sup>17</sup>。でも舞いたくて仕方がないと言う女の子が出てきて、花祭での舞を許したということです。40年ぐらい前まではダメでした、どういうわけか。

今野：県内の祭礼で女人禁制のところは結構多くて、本学のある長久手の警固祭は、いまでも男性だけが行列に参加しており、棒の手を披露するのも男の子だけです。昔は行列を通る道を女性が横切ただけで怒られたという話も聞きました。男女の役割分担は色々ところで緩んでいますが、長久手は比較的緩んでいないようですね。

佐々木：でも女の人もおらにゃ、後継者がいない。

今野：結局緩んでくるのは、人手不足と、やりたい女性が出てくるということと、その両方で徐々に女性が参加するというのが、きっかけのようです。女性が参加する時には、花の舞、三つ舞、四つ舞をするということで、鬼とか市の舞とかではないのですか。

佐々木：そうですね。一応四つ舞までやったかな、2年前。高校2年だか3年だか。結局役を決めていくのに、募集というか各組内で決めてくるわけですが、それを組み合わせると、どうしても穴が空いてしまうところがある。そうすると、直にその子に頼むんですよね。それでいいよということで、四つ舞の本楽をやったのはあの子が一番遅くまでじゃないかな。女の子でも、力強さは若干欠けるけれども、舞そのものは舞ってくれるし。

今野：中学生ぐらいの・・・。

佐々木：いや、高校生。

今野：あまり年配の女性が舞うのは・・・。

太夫：それは無理ですね。

今野：まあ子供ですね。高校生とか、力強い女性の方。

佐々木：特に何歳までしか舞っちゃいかんと言うのはないのですが、鬼だとかは無理にしても、普通の舞であれば別に困ることもないし、舞って欲しいぐらいですよ。

コロナ対応について。昨年度はどうするか考えて、結局は多少やったですよ。市の舞や地固め、三つ舞はやらなんだかな。普通の正月だと子供が実家に帰ってくるから、その子たちにも舞わすことができる。今年は誰も帰って来なくて、舞えるような

---

<sup>17</sup> 古戸八幡神社の「御神楽祭」（12月第2日曜日）は、「十五童の願ばたき」とも呼ばれる。古戸では、旧暦2月の初午の日に、害獣を追い払い豊作を祈願する鹿討神事を行うが、その際に数え年2歳の子供が健全な成長を祈って立願する。そして子供は無事成長して15歳を迎えると、願ばたきの祝詞のあと、立願成就のお礼として、花祭の舞を奉納することになっている。また閏年には、「八幡の舞」が奉納されることになっている（新城南北設楽広域市町村圏協議会『奥三河の歳時記』（平成12年）、59頁）。

状態ではなかったです。鬼は櫛をやったのかな。飾り付けなどはやって、昼から始めて、適当な時間に終わって、あとはご苦労様の方が長かったぐらい。全く止めたかというところではない。神寄せから何から、一応我々の儀式はやった。来てくれた人に、舞を見せずに帰れと言うわけにもいかんから、とりあえずはそれなりのことはやらせてもらいました。

今野：集まった人は少人数で、東栄町内の方ぐらいですか。

佐々木：そうそう。部落の人もほとんど来なかったんじゃないかな。会場の周りの人が、やっとなるから見に行くかというぐらいの感じだった。そんなに密にはならなかった。

今野：インターネットでは、中止と掲示が出てましたね。

佐々木：周りにポツンポツンとおるぐらい。あとカメラマンが2、3人おる程度でした。



古戸花祭の接待（平成31年1月3日）

令和2年12月の白山祭もそうだった。やらんと言うことにしてあったんですが、本当にやらんかと言われると、「実はね・・・」となっちゃう。「それじゃ、写真だけ撮らせてね」と来た人はおりました。好きな者は遠くから来るんだよね。本当にびっくりするわ。我々だったら絶対あんなところ行かん。盆も、尾張一宮から毎年来てとった人がおった。写真だけ撮って帰る。何とか今年はやるかという話をしておるが、今のままギリギリ収まっていけば

できるのかなと思いつつも。じき10月だからそういう話もしなきゃいかんですが。10月の神社のお祭りも拝むだけで、余興などはなし。白山神社もお宮さんの行事で拝んだだけで、他の行事はなし。我々は、白山祭を去年のような形でやるつもりでおります。2年もやらないと、絶対子供達は忘れちゃう。特に初めて舞った子たちは。3歳や4歳ぐらいで舞いますから。衣装付けて出てこれば、それで舞ったことになる。ちょっとキョロキョロしながらグルグル回って。一通りのことは稽古をやりまわす。問題点はそこら辺だな。あと子供の数が少なくなってくると、どんどん舞そのものが縮小してくるし、一人が2つやったりということがあります。来て、舞わせて欲しいと言われれば、いくらでも舞わせてあげますので。鬼の弟子[伴鬼]なんか被ったら爽快。最後の茂吉鬼の弟子は、ちょっとうろうろしていると引っ張り込まれて、このまま出てけとか、そう言うパターンが多くなってきた。全然舞えん、見ると簡単だと思うんでしょね、舞いたいって、出ても舞えん。

伊藤（教育委員会）：先程紹介のあったDVDを持ってきました。

佐々木：初めの方にチョコチョコチョコと、蔵みたいところが映っておじいさんの顔が最後に出てくるんだけど、何人か出てくるんで、そのうちの1人が私です。

<上映>

今野：白山祭と花祭、更に御神楽があって、かつては田楽もあったということですが、古戸の特徴は花祭だけではなく、白山祭が別箇にあって、類似のものを何回もや

るところにあると思います。同時並行でやるようになった言われのようなものはあるのですか。

佐々木：それは聞いたことはないが。古戸は季節ごとにいろんなものがあるね、大変だねと、よその部落に言われる。ただそれらには[子供の成長を願うという意味での]繋がりがあがるようです。初午行事は生まれた子供のお祝いで、鹿討神事は害獣退治という意味合いだけでなく、生まれたばかりの子供の害を祓うという意味合いもある。15歳になった時の願ばたきも子供のお祝いで、これらにはみな繋がりがあがる。初午の時に矢を射るのは、健康祈願も含めてだけでも、子供達が健康に育つことによって、花に繋がっていくというのがあると思うのです。

今野：古戸の生活のなかで連続しているというか、1つ1つが別箇に存在するというよりは、相互に関連した形で存在しているということですね。

佐々木：そうですね。これはこれと別のものとする、拝む人も別々になったのかなと思うが、白山[祭]も、初午[行事]も、願ばたきも、我々が拝んでいるということで、1つの流れになっていると思います。

今野：神道の影響ですが、廃仏毀釈で神道が大きく力を増してきたときに、もともと神仏習合でやっていた花祭が変化した場合があるわけですね。中設楽は神道化して、津具も騒動があつて逆に神事が無くなったということです。古戸の場合は、廃仏毀釈による影響はあつたのですか。

佐々木：特に聞いておりませんが、我々は昔から行っていることをそのまま続けているということですね。ここに古い書物があります。1回、古戸で分からんようになった時に、かつて古戸から布川へ教えに行ったと言う流れから、布川の世襲花太夫の尾林さんのところへ、もう1回聞きに行ったことがありました。それで写し直してきたのがこの書物です。いつも我々が拝んでいる唱えごとが書いてある。古戸から布川に教えたものが、今度は逆に入ってきたのです。ただ廃仏毀釈というのは影響が特にはなかったのではないかと、むしろ影響せず、あつても昔からの流れをやっつけてしまふということじゃなかったかと思えます。ただ八幡神社は、かつては清水権現だったのが、廃仏毀釈の時に八幡神社になりました。昔は門があつて、仁王像があつたのが、いまは普光寺の中に収まっています。

今野：普光寺が八幡神社の横にあるというのも、神宮寺というか、ワンセットで考えられていることなんでしょうかね。

佐々木：仲良くしとつたということです。

今野：一体化していた、かつては。明治の神仏分離で、そのところは変更があつたというか。

佐々木：若干はあつたとしても、それ程大きな影響は受けていないんじゃないかな。

今野：集落にまつわる行事ということですが、長久手には猿投神社という西三河の神社に馬を奉納するという行事が昔あつたのですが、その時集落ごとの順番を巡って、乱闘があつたんですね。長久手のある集落と、いま日進市のある集落とが派手にやっつけてしまつて、流血沙汰になつたということです<sup>18</sup>。また、長久手市内でも、字によつ

<sup>18</sup> 『長久手町史 本文編』（平成15年）、554-556頁。

て左義長をやる時に、お互いに邪魔しに行って、他の集落の左義長の塔を壊したりとか。そのように張り合ったりすることが、長久手ではあったというのですが、こちらは集落間のライバル関係や喧嘩などの逸話があったりするのかなと。

佐々木：よく言うのは、花がどこから伝わってきたのか。古戸だ、古戸だと言っても、本当にそうかと言うのもありますが、明らかに古戸から伝わって来たものが、大入[系]は別にして順番に分かれていって。そう言う話はしても、いやいやそれは違うよと言う人はいないですね。字単位の争いはないし、部落もいま古戸に7組にあるが、昔は7組で花をやっていたが、川合という津具に近い部落は、遠いから稽古に出てくるのも大変だから、花の役はいいですという時はあったんですが、ここ30年は子供も舞いたいし、人口も少なくなってきたと言うことで、川合も花のお役と一緒にやることになっています。特に諍いがあって、どうのこうのと言う話は聞きませんね。

今野：もちろん、諍いは無い方がいいと思うのですが。

中西：いま仰った組と言うのは、ここに書かれているものですね。

佐々木：そうです。川合は入っていないかな。遠いから行くのが大変なんです。稽古も、私たちが小さい頃は、1箇所ではなくて当番で回ってくる。ある程度の年齢になると太鼓持ち行ってこいということで、太鼓を担いでドンドンドンやった覚えがある。今のように1箇所で稽古をやって、その会場で花をやるということではなかった。川合と言う部落は最近ではまるっきり、その中には入っていないと思います。川合まで1里、つまり4キロあるので。

中西：花祭には加わらなくなっても、それ以外の何か・・・。

佐々木：行政的なものは含めて、1つの古戸という村のなかの繋がりは常に保っています。ただ川合で花が大好きだという人は、いまもおらんね。40歳前後の子は、来て上手に舞ってくれるが、我々の年代の者だと、大好きな人はいない。どこもかも大変な時期が来ていることは間違いないですね。

古戸マップも、補助金で作りました。私はそこの副会長をやっとるんですが、古戸聖会が都市部との交流事業をやることによって、定住人口を増やそうじゃないかということが主眼なのです。いまは百姓[作業]を通じて交流活動をやっています。前は名古屋に行ってマルシェで販売していました。いまはこんな時期だから来てもらって、百姓をやってもらおう。後はさつま芋、ピーナツ、里芋を植えたり、収穫したりしに来てもらっている。年に1回イベントがあって、多い時は100人ぐらい来る。鴨山川、古戸会館の下に大きな淵があって、そこで子供を遊ばせるんですよ。それが楽しみで来るのです。でも去年も今年もコロナでダメ。あとは焼肉やゲームをやったり。それを楽しみで来る人が大勢います。ただ、私の家の前に農場があるのですが、本当に誰か来ると、何しに来たのかなと、目の前にあるからほってはおけないし。

そこ（古戸マップ）に円空仏が載っていますよね。花祭の話をしに豊橋の老人クラブ



インタビュー参加者：左より野村、柴田、佐々木、今野、中西、青山の各氏（伊藤氏撮影）

に行ったのです。奥三河の戦国期の話をするとということで、何かの話のネタになるなと思って、円空仏を持っていきました。そうしたら参加者の1人が、「私は全国の円空仏を見てきたけれど、これは佐々木さん、円空さんに間違いないから、鑑定を受けた方がいいよ」と言われて、羽鳥市まで持っていったら、間違いなく円空さんだということです。いまは厨子に入れて置いてあります。1700年代のもの。宝物です。家で円空さんが見つかったから、「これもそうじゃないか」と持ってくる人もい

る。鳳来町、今の新城市北部にも一体あるのです。

### 3. 津具花祭保存会<sup>19</sup>（9月17日14時～16時・於設楽町役場）

参加者：高井公夫氏（保存会代表）／高橋三郎氏（設楽町教育委員会教育課課長補佐）・金田直樹氏（設楽町奥三河郷土館所属学芸員）／丸山裕美子教授（日本古代史）・井戸聡准教授（社会学）・柴田陽一准教授・中西啓太准教授・野村仁子講師・今野元教授（以上愛知県立大学）

今野：まず津具花祭の起源に関してですが、高井様のご理解ではどのような感じでしょうか。

高井：起源は鎌倉時代、いまから700年前と祖父から聞いていたのですが、それからもう50年経ってしましまして、もう750年ぐらいということで、いまは説明しています。

ただ明治初期に、旧津具の花祭が途切れています。昔はお面などを置くところがないものですから、小学校の倉庫に置いてあったんですね。その倉庫が[明治25年4月12日に<sup>20</sup>]火事で焼けてしまって、もう舞ができないということで、その時点で途切れたわけなんです。その後7人の有志が、もう1回やるぞということで興してから、現在に至っています。その時[まで]はもうちょっと大きいお面もあったのですが、京都のほうに持って行って、半分あるからこれと同じのを作ってくれと言った時に、材料と予算の関係もあり、やや小ぶりになったと聞いています。

柴田：1回途切れてから復活するまでのスパンは、どのくらいですか。

<sup>19</sup> 津具花祭は下津具を起源とするが、保育園児が花の舞に参加するようになったのを契機に、上津具の子供も保存会に加入するようになり、津具全体の保存会という意識が芽生えつつある（『津具村誌』（平成12年）、500頁）。

<sup>20</sup> 『津具村誌』（平成12年）、496-497頁。



高井：明治の時ですね。＜中略＞僕らにとっては大事なお面も焼けて、でも上は焼けても下は焼けなかったので、半分残ったのを7人の有志が京都へ行って作ってもらったと<sup>21</sup>。

＜中略＞

今野：復興してからしばらくは廃仏毀釈、国学の影響があり、禰宜と呼ばれた祭司が離れて神事がなくなり、舞を重視するようになったと『津具村史』に書いてありますが<sup>22</sup>。

高井：振草系・大入系の2系列があります。大入系の方が拍子が速い。僕らは大入系なんですけど、そのなかで、東栄町に比べると、水を取ったりとか釜の中に入れたりとかは、あまり儀式として聞いていませんし<sup>23</sup>、うたぐらもありますが、寺院が少なかったので、いまはやっていないんですよ。

今野：明治からは「倭舞」（やまとまい）と名乗っていて、昭和51年に「花祭」として広域で認定された時に、また「花祭」という元々の名前に戻したと『津具村誌』書いてあったのですが<sup>24</sup>。

高井：20年ぐらい前に通帳を預かった時に、倭舞の通帳といまの津具花祭保存会の通帳と両方がありました。昔は倭舞という呼び方をしとったのだと、いま85歳ぐらいの方に聞いたことがあります。

今野：津具花祭の特徴、他の集落との違いはいかがでしょうか。

高井：基本的には、どこもやはりうちの舞が一番良いぞっていうことでやっているわけですね。特に他と違ったところというところ、うちは「上げ花」をやっています。結局リクエストをいただければ、役鬼を上げて頂くと。そうすればそれはうちの方でやって、菰という藁で編んだものを、神様が踏んだものということで、記念にお返しするという形で、榊と御神楽と味噌を塗った摺りこぎをやります。これは他のところでは、恐らくやっていないと思います。うちの場合は、リクエストが何回もあると、舞が極端に長くなる時もあるんです。一舞で25分から30分かかるので。最近では、榊ばかり一晩のうちに8つも9つも出せないものですから、菰自体を重ねて、同じことだと理解していただいて、お返ししているような状態です。

---

<sup>21</sup> 面の修理先については、京都説と名古屋説とがある（『津具村誌』（平成12年）、497頁）。

<sup>22</sup> 『津具村誌』（平成12年）、493-496頁。

<sup>23</sup> 大入系は元来、前段儀式の部分が少ないとされる（早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）、前編17頁）。

<sup>24</sup> 『津具村誌』（平成12年）、499-500頁。

今野：津具花祭を一度見せて頂いたことがあるのですが、「上げ花」、別の集落だと「一力花」、「御願花」などと呼ぶところもありますが、特別に寄付をして自分のために祈って欲しいと、飛び入りでやる舞ですね。津具の場合は、「一本榊」という形で何回も鬼が出てきます。普通だと、山見鬼、榊鬼、茂吉鬼という風に、計3回しか出てこないわけで、それはもちろん津具[花祭]にもあるのですが、その間にもまた「上げ花」という形で鬼が入ってきて、華やかな感じがするなと思います。また、頻りに摺りこぎでお味噌を塗りにきたりするので、楽しい瞬間が多いという印象を受けました<sup>25</sup>。



津具花祭インタビューの光景（左より高橋、高井、金田の各氏）

高井：また、他のところでやっているか分からないのですが、舞習いを25日から始めるのですが、30日に「刀立て」、分かり易く言えば予行演習をします<sup>26</sup>。いまはないのですが、昔はどこでも庭が広がったものですから、新築の家とか、嫌なことがあって魔を祓ってくれということで、やっていました。僕らが小さい頃は、どこかに必ず宿があってやっていましたが、最近では舞うところが無いですし、やはり12月30日というと女の方は集まらないですね。結局、いまは3年か4年に1度程度で、それ以外は予行演習ということで、25日から高[齡者]若[者]センターというところで刀立てをしています。「刀立て」という語の由来は、刃物で魔を切るということで、鬼は鉞を持って、三つ舞、四つ舞は刀を持って舞います。それは役ということで、それが衣装を着てやるものですから。「刀立て」でも半日ぐらひはかかります。

今野：「刀立て」というのは一種の出花というか宿花というか、出張するということですね。それが予行演習にもなっている感じですね。

高井：特に子供たちは、花笠なんかは役ではないが、小さい子もいるし、衣装を着て舞うことをまずやってもらうということで、そういう形でやっていますが。建築様式が変わったもので、なかなか宿がないのです。

今野：うたぐらの件ですが、[私が見たときは]何か歌われていたような感じはあったのですが。

高井：太鼓が歌うということで、僕らが「伊勢の国」と、僕らが20歳過ぎらいまでは太鼓叩きながら、一杯飲みながら鼻歌をしてましたね。その拍子もうたぐらの原本もまだあります。東栄の小林から毎年来られる方がいて、その人が作ってくれまし

<sup>25</sup> 『津具村誌』（平成12年）、502-503頁。

<sup>26</sup> 『津具村誌』（平成12年）、500-501頁。「刀立て」は、早川孝太郎によれば「第一日の祭祀」であり、かつて古戸の白山祭（高嶺祭）もその一例だったとして見られている（早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）、前編81-91頁）。

た。その方は名古屋に居て、花祭が好きで、小林で結婚された、花狂いの人です。毎年来てくれて、作ってくれたのです。そういう原本があり、3、4部置いてあるにはあるのですが、なかなか今年から始めるかとはならないです。

今野：明治初年の混乱のなかで、元々のものがおそらく無くなったと。

高井：そうですね。間が空いた中で、舞子もおらんと同時に、お金がないというのが事実だと思うが、なんとかやるために、知恵を絞ったのが上げ花じゃないかなと、僕らなりの解釈をしています。

今野：開催場所の変遷ですが、『津具村史』によると、元々は宿花だったというんですね。日清戦争で津具村からの戦死者がいなかったので、[神官の夏目伊録の提案で、]白鳥神社[白鳥大明神]に感謝して、宮花にすることにしたと。もともと宮花は、白鳥神社の拝殿と同じ高さでやっていたけれども、のちには下の所で、土俵をやって神楽殿みたいところでやるようになったという理解ですか<sup>27</sup>。

高井：そうですね。明治以降でない僕らは知らないですよ。私の祖父が言うには、昔は白鳥神社の階段の下で、いまでも四隅になっているところがあり、そこで旧[暦]の[1月]15日にやとったと。昔は電気がないので、明かりを得るために、満月を選んで舞をやったと聞いたことがあります。僕らの小さい頃は、練習[刀立て]をすることで、宿がありまして、庭が広くて飯も食べさせてくれて。毎日宿が変わりますので、太鼓を担いで宿へ持っていくのが仕事みたいなものでした。いまはそんなことやったら叱られますね。

今野：集落外の方の奉仕、人材確保が大きな問題だと思いますが、これについて、いまどのような形で行っているのですか。

高井：これはどこでも一番困ることだと思います。他のところに比べると、津具は旧の津具村と旧の設楽町と合併して、設楽町になっていますが、その中で花祭が1つだけなんですよ。豊根にしても東栄にしても、人口に対してやっているところが多いです。ですから僕ら以上に、それに関しては大変じゃないかと思う。僕ら舞っている人間は分かるんですが、自分のところの舞が一番なんですよ。だから子供が少なくなると人数が少ないから、あそこあそこ一緒になればできるんじゃないというのは、それはおそらく無いと思う。それは自分たちのところの花祭のプライドを捨てるのと一緒ですから。それができないだけに、難しい問題に、これからもなっていくと思います。

今野：皆さん、そう仰いますね。人が少ないから皆まとめて一回でやればいいのか、そういうことは[できないわけです]。東栄フェスティバルみたいな行事は有り得たとしても、行事自体を合併するのは考えられない、それぞれの流儀があつて。

高井：あり得んでしょね。

今野：個別に、東栄の方がうたぐらを作るのを手伝ってくれたりとか、そういう手伝いはあるかもしれないですが、合同でやることはできないということですね。

高井：うちの方へも、花祭が好きな人がいますし、舞子たちも他から来て、一杯飲むんですわ。「おい、うちのをちょっとやらせてくれんか」と。「いいよ、いいよ、や

<sup>27</sup> 『津具村誌』（平成12年）、498-499頁。

ったらどう」ということで、「ただいまからやるのは奉納で、小林の誰々に踊ってもらいます」というと、逆に受けるんです。そういうのはあります。それぐらい他所の花祭を見とつても、疼いてきて、俺んとこのも見せてやるかと。僕らが他所へ行けば一緒ですから。それぐらい自分のところの舞にプライドを持って、一番格好良いんだというのがなければ、なかなか伝えていけないところがあるもので。

今野：他の集落で伺ったんですが、草鞋を作成するのを外部の人に手伝って頂いたりとか、そういうことがあると言うことですが、津具の花祭の場合にはそういうような手伝いを、外部の人にしてもらわないのでしょうか。

高井：通常の草鞋だと切れちゃうから、ちょっとビニールを編み込んで、切れないようにするんです。それを作ってもらうのに、花祭をやつとところが一番知っているのです。だから、いま草鞋を東栄の方に頼んでいます。50とか100とか作ってもらって、2、3年はそれで過ごすのです。その前は豊根で、その前は地元の老人クラブで作ってもらったのですが、だんだん年を取ってできなくなっていきました。菰などは自分たちで作っています。ヤグい[脆い]草鞋だとすぐ切れてしまうものだから、花祭で編んでいるところに頼むのが、一番無難です。

今野：ビニールを編み込んで強化するのですか。

高井：そうです。通販も買ったのですが、ダメでした。安くていつでもっていうので買ったけども。大人しく、草鞋が切れんように舞えばいいのだけれども、それはまた別の話になっちゃう。

今野：舞がそれで気合が入らなくなっちゃうと、つまらないですものね。

高井：僕らの保存会のメンバーでも、東栄町の方に行っているよという人がいて、そのツテで頼んでもらうわけです。いまはそういうルートでやっていますが、これもずっと保証されるものではないですから。

今野：財政的なことですが、いかがでしょうか。

高井：[資金は]あるに越したことはないですよ。コロナで花祭は中止ですが、それ以外にも経費がかかりますので、そういう支援はしますよと、町役場の方々には言っています。うちの方は「上げ花」がありますので、当日開催しないと1円も入ってきません。それでも[コロナで営業できず困窮している]料理屋さんに比べれば、一年に一回がなんだという話でしょうが。ただあまり間を置くと、子供が舞を忘れちゃう可能性もあるし、[背格好が]大きくなっていくわけです。いままで[花の舞の]花笠という稚児の舞で、一番小さい子が舞うのが2年たつと大きくなって、花笠できんなとなることもあるかもしれん。それも開催できるというのが前提で、次のステップに入ることですので、何とも分からないです。昔は大人もお年玉をもらっていました。観光協会が津具と設楽とで一緒になって、そうすると融通するお金がないと



神鬼（左）と古神（右）（平成31年1月2日）

ということで、従来よりは逼迫していますが、まあ世のなかそういう風になってきたものですから、設楽町の津具地区の花祭ということで、大人は舞って清めればお金をもろうよりもいいと、それを5年程前から。子供はそれが楽しみってこともあるので、子供だけにはお年玉を出していますが、それ以外は余ったら蓄えておこうと。そうじゃないと、鈴が1つ10万円とか、衣装が上下で30万円とかするものですから、そういう時のためにある程度の預貯金をしとかんとまずいなということで、いまは[節約]しています。

今野：東栄町のある集落で、花見舞で200万円ぐらい集まると言っていますが、どうですか。

高井：そこまではないかな。うちの方は2年程前で110、115万円ぐらい。榊が1本3万円です。やっているものから、1本、2本出る出んで違ってくるのですが。以前は、僕らも観光協会に任せちゃっていたから分からなかったのですが、いまは[2つの観光協会が]一緒になって、会計を全部自分でやるということになって、そうすると幾らぐらいお金が入って出て行くのかを把握するようになりました。それまでは、舞子は舞うのがメインだから、やって赤字になるか黒字になるかよりも、舞うことの方が頭にあるわけです。補佐して会計をやってくれるところがあったから、余計そうだったのかも知れませんが、[いまは自分で会計をしています]。本当は[1月]3日に収支報告するのが良いのですが、皆一昼夜寝てないので、帰るのが先で、いまは反省会ということで、5月の虫干しのあとに報告をしています。

今野：次に祭司主催者ということで、花太夫と宮人とがよくいるのですが、その家系とかどのようになっているのかと<sup>28</sup>。津具の場合には、花太夫はいないのですね。

高井：うちの方では聞いたことがないです。東栄の方ではちょこちょこ耳にしますが。

今野：津具には元々禰宜の家というのがあったようですが。でも明治になってそれも離れて、今はそういうのはないということですか。

高井：あそこが元の花禰宜だよ、と言われていた家はあります。

今野：いまはあまり関わっていないということですか。

高井：もうないですね。そこがあれば、書物があるということで、それは早川孝太郎先生が調べ尽くして、文章化していますから、それ以上のものはないのかな。

今野：宮人という言葉もない。

高井：ないですね。

今野：では保存会の会員さんが運営されているということですか。

高井：ただ、1回消滅した後で興した方の家系が元になって、その子供・孫[が引き続き活動しています]。基本的に花祭は惣領、長男がやるんだと。長男がやれば、花祭をしなければいけないから田舎におらにゃいかんと。否応なしにそれが過疎対策に

---

<sup>28</sup> かつて下津具には、溜淵、能知、北方などの字に18戸の宮人屋敷があったという（早川孝太郎『花祭』（岡書店、昭和5年）、前編425-426頁）。また、「榊屋敷」、「山見屋敷」という具合に、家によって舞う演目も決まっていたという（『津具村誌』（平成12年）、496頁）。

なると、私の祖父は言っていました。確かにそうで、昔は7、8人子供がいて、男の子が1、2人必ずいるものですから。

今野：いまは代表の高井さんを中心に組織して運営されていると。

高井：そうですね。順番で私に回ってきたものですから。僕らの同級生でももっといたのですが、途中で辞めていってしまって。私の前の会長が私より4つ上で、その間もないし、不肖私が引き継いだわけです。一応4年ぐらいのサイクルで引き継いでいくということで。ただ、「あなたはどこの家系で」というのは一切ありません。

今野：＜中略＞他集落との協力に関してはすでにお話しいただきましたので、次は神社仏閣との関係ですが、白鳥神社で行われているということなのですが、元々はお寺とも関係があったのかどうか、そしていま白鳥神社とはどのような協力関係なのか、お話しいただけますか。

高井：白鳥神社に、花祭会場である私たちのテホへの館があります。ちょうどコロナになって花祭を中止する場合、白鳥神社との関係はどうかと[長老に]聞いたら、「それは別に関係ない」と。いままでは私の方が白鳥神社まで出向いて、必ず地固めの舞の剣を奉納して、それが終わって下がって来たら、舞庭で[ばちの舞以降の<sup>29</sup>]花祭を始めたのです。それは単なる奉納で、うちの方が白鳥神社に対して出向いてお願いするだけで、神々との関係はないということでした。

今野：花祭は、それ自体として宗教と密接な関係があるのに、宗教施設との組織的關係がなく、実質村民によって運営されていて、宗教者が先頭に立っていないというのが、興味深いと思いました。花祭は、場所は神社であったとしても、あくまで村人主体の祭礼であって、白鳥神社での奉納はあっても、地固めの剣より後の舞をやっている時は、神社は静かに佇んでいて、別の世界になっているのですよね。仏教は、江戸時代までは関係があったそうですが、いまは全然関係ないのですか。

高井：廃仏毀釈と焼けた時期とが重なって、それからまた興したものですから、それ以降は、津具は津具なりに、お金がないならないなりにと、好きな人間が花祭を興さないかんというのが、スタートではないかと思います。

今野：祭事奉仕者の精進潔斎についてですが、祭礼をやる前に避けられていることはありますか。

高井：一応四つ足は食べるんじゃないと、昔から言われています。また清めるということで、お不動様といって舞庭の裏に小さい滝があって、そこで手を清め、湯ばやしの水も、最初はお不動さんの水を入れるとかはやっています。

今野：他の祭礼だと、例えば女性と完全に別の居住スペースで一定期間過ごして、男性が作ったものしか食べないとかやるところもありますが、津具ではそういうことはやっていない。

高井：ないですね。うたぐらのなかにある一節で（伊勢の国高天が原が此処なれば集まり給え四方の神々）、「七滝や八滝の水を汲み上げて、日頃の汚れいまぞ清めん」と念じながらやるんですが、一応そういうニュアンスはあるんでしょうね。

<sup>29</sup> 『津具村誌』（平成12年）、503-510頁。



今野：開催時間の件ですが、変遷はありましたか。

高井：あります。かつては、昼の1時頃から始めて次の日の朝に終わりました。その頃は舞子も少ないというのもあって、四つ舞関係で人数もいるし、夜遅くというのを抜いていたというのもあるんですよ。なぜ抜くんだというと、上げ花があるから、そっちが中心になるものですから。そういったことでかつては、1時に始めて次の日の3時ぐらいに終わって、2時間ぐらい仮眠を取って、それから片付けをしていたんですが、1、2時間寝て片付けをするのはしんどいということで、いまは始めるのも2時ぐらいですし、終わるのは朝の9時ぐらいですね。フルで抜かずに三つ舞も四つ舞もやっていて、それに上げ花が入り、朝の8時半から9時にしずめの舞で最後になります。それから片付けてご苦労様というパターンを、いまは続けています。

今野：集落によっては、夜通しが辛いので、朝から晩まで、夜をまたがないでやっ  
てしまおうというところも出てきているみたいですが。そういった議論は、津具の場合にはないですか。

高井：ないですね。昔からそれが当たり前だと。なぜ2日だという議論はちょっと  
出ましたけど。上げ花で上げてもらうために、見てくれる人も多い方が良くてこと  
で、2日は動かさないで、ずっときています。当然[刀立てには参加せず]本楽だけで  
舞う舞子もいるんです。よそへ出ちゃって、本楽だけに帰ってきて、「おい、鬼や  
れ」と声をかけて鬼をやる人もいるから、2日というのは良いのかなと思っています  
。確かにしんどいですけどね。初めてコロナで花祭が無くなって、お正月はどうい  
う過ごし方をするのかなと。知らないですよ、小さい頃から正月は花祭が当たり前  
だから、何をすればいいんだと。それがコロナで唯一、気付いた点ですね。

今野：道具の管理・更新なのですが、これはどのように行っているのでしょうか。

高井：県の方から、文化財の保護ということで、仮にかかる費用が50万円とした  
ら、半分は出しますよと言って頂いています。鈴などは新調させてもらったのです。  
衣装なども、ほとんどが明治か大正のものばかりです。いまは体型も違うので、  
いまの子は足が長いものですから、たつけども、昔のだと短くなっちゃうんですね。  
花笠は、背中が全て錦糸で作っているのですが、とんでもない額がかかるんですね。  
新調はできないので、補修するかということで、そういったことで結構かかります。

今野：いまは小学校ではなく、燃えにくい施設に保管してあるんですか。

高井：どうかな。一応柱は銅板で巻いてあります。

うちは、他に比べると舞庭が高いんですね。本当はフラットの方が良いという案  
も出たんですけど。

今野：周りで群れるには、フラットの方が良いかなと思いますが。

高井：そうそう。津具の場合は、他に比べて野次舞が少ないということ、見に来ら  
れた人が言うんですね。一段高さがついていると、「お前行け」といってもやっぱ  
行きにくい。でも舞庭の上に柱が乗っかっているものですから、今更低くするの  
もなかなかできないです。当然お金もかかりますし。一応ずっとあの状態でやっ  
ています。20年ぐらい前に、格天井のベニアがめくれてきちゃって、その時に  
いた絵描きさんに描いてもらったんです。それも結構かかったから。いま役場  
の方から、将来は花祭保存会の方で、テホへの館を保存していかないとまずい  
んじゃないかと話は出て

いるので、その前に直さないといけないものもあります。協力して頂くことができたから、直したいなと思っています。でも僕ら自体が集まる機会が減ってしまったので。今野：津具の場合、土俵のように高くなっているので、舞人の周りに観客が群れるのが難しい一方、周囲に観客席が完備されているので、見やすいですね。

高井：かもしれませんが。昔は野次を見に、皆さん来られたみたいですね。昔はテレビもないし、花がある時はみんな来るわけです。その時に口喧嘩をしたらしいんですね。「お前んとこのおっかあはどうかのこうの」、「何言っとるだ、お前んとこのおっかあはどうかのこうの」と。それが面白くて、アハハ、アハハと笑って、賑やかだったとうちのお袋は言っていましたけどね。

今野：舞の稽古の実施状況ですが、刀立てを12月30日にやるのが総稽古という形になりますか。それをやって当日1月2日に本番を迎えるのですね。

高井：そうです。31日は年取りということで、どこの家でもできないから、2日の朝からするんですが、その前に切り草は切っておいてもらって。

今野：12月30日には通し稽古をするわけですね。

高井：30日は必ずしますよ。宿があれば宿でやるし、なければ練習場所の高齢者若者センターで。ですから刀立ては一つの行事なんですね。

今野：「刀立ても含めて花祭」みたいな感じなんですね。

高井：そう。刀立てをやらなかったというのは、僕の記憶ではないですね。

今野：他の集落でも、事前に通し稽古をやるっていうのはあるんですが、津具の場合はそれが行事として確立していて、単なる練習という位置付けではなく、それも行事の一部になっているわけですね。

高井：そう。刃物を役としてやりますよという解釈ですね。

今野：見学者に対する保存会からの要望など、見学者について思われることはありますか。

高井：地元のお客さんは年配の方が多くなってきます。いま豊根・東栄・津具の間を、マイクロバスを走らせて頂いているものですから、遠い方が見に来たというのがあります。それとスマホですね。「どちらから見えました」と聞くと、「東京だ」と。「なんでここの花祭知っとるの」と聞くと「スマホで見ました」と。「正月やることないな。こんなの面白そうだから行ってみるか」と。伊那の方まで来て、そこからこちらに来てという人も、グループで見えます。ただ下世話な話ですが、地元の人なら榊に3万円あげてくれる方もいますが、外部の方は500円のこともあり、上がりが少なくなってきたですね。

今野：花祭を見る側の作法として、ある程度ちゃんと花見舞を納めて、祭りに参加するというのが大事だと、私も見学者の1人として思うのですが。カメラマンのトラブルとかは大丈夫ですか。

高井：いまのところ大丈夫です。カメラを撮られる人は、毎年来られる方なんです。『花狂』という形で写真集を出したり、自分で撮ったものを展示してもらおうとか<sup>30</sup>。

---

<sup>30</sup> 高井氏より以下の複製の寄贈があった。高橋遊『奥三河下津具花祭写真集：花狂い（第4回清須市はるひ美術館写真展記念）』（年代不詳）。

カメラマンに関してはないですね。ただ1昼夜みえるでしょ。食事するところを設けてあるので。味噌汁とご飯と漬物ですが、逆にそれがいいということで。



津具花祭の接待（平成31年1月2日）

今野：美味しく頂戴しました。

高井：津具は接待が良いということで、毎年来て頂いています。

今野：女子の参加ですが、各保存会それぞれ、女性の参加が始まったり始まらなかったりしていますが、津具の花祭の場合にはどのような状況ですか。

高井：10年以上前から入っていますね。僕らよりの上の方の解釈で、子供は稚児なんですよね。稚児というのは神様の使

いなんですわ。それを入れんというのはおかしいという解釈で、背景にはこれから先、女の子も舞ってもらわにゃ、どっかで切れちゃうなというものもありますしね。子供の頃は、女の子の方が好きなんですわ。男の子はただ見とるだけだけど、女の子は体が揺れて、これはものになるなど。女の子は、好きな子が多いものですから。好きなら舞わせれば良いじゃないかということで、いまは別に女の子だから[ダメ]というのはいないです。

今野：舞の種類ですが、三つ舞や四つ舞や花の舞は、よく女の子がやっているのを見ますが、撥の舞や地固めや鬼は、女性がやっているのは見たことがないのですが。やっぱり津具の場合も、女子の場合は三つ舞や四つ舞や花の舞が中心ですか。

高井：まあ三つ舞までじゃないですか。花の舞の盆でん[花の舞の一種で、「花笠の舞」、「盆の舞」に続き、幣束を持って行う「盆でんの舞」]、それから上ですと、高校生ぐらいになるので。高校生ぐらいが一番やんちゃで来ないんですわ。他に面白いことがあるらしくて。その頃がスコンと空いちゃうんです。また20歳過ぎてから「こんにちは」って来てというパターンが多いですね。

今野：20歳以上の女性がやられることがあるんですか。

高井：いまのところは[ないです]。高校までやっていた旅館の娘がいるんですが。

今野：コロナになって、祭礼がどのような形になったのか、去年の年末年始の状況や、今後どのようにお考えになっているのかを、伺いたいのですが。

高井：これは私の一存では決められないことです。去年の例を出しますと、長老たちが集まって、どうするねと相談しました。基本的にネックになったのは子供です。練習するのは子供の舞が中心ですが、子供に感染させたらまずいぞということと、東栄町の花祭が中止になったもので、うちの方も中止させてもらうということで。まさか今年もそんな話をせんといかん状態になるとは、どこでも思っていないもんですから。

今野：先の戦争の時は、どうされたんですか。

高井：おそらく花はずっとやっていたと思います。

今野：では今回の中止は大きな変化だったと思うんですが、中止は完全にですか。

高井：完全に中止です。

今野：集落によっては神事だけやるというところもあるのですが、神事はないですものね。

高井：子供だけやったというところも聞いていますが、うちの方は白鳥神社との関係は無い、うちの花祭だけ止めても支障はないという確認をとって、無しということ。比較的若い人が、それでも寂しいので、何か2つ、3つやりたいという意見があったものですから、それはそれでも良いんじゃないかとも思ったのですが、結局はやりませんでした。

今野：次回のことはこれから決めるのですか。

高井：それは10月半ばぐらいまでに決めないと。観光協会に支障が出てしまうものですから。私個人としては、ゴーは難しいんじゃないかと思うんですが。[花祭は]元々神事なんですよね。皆様が平和、五穀豊穰、無病息災のためにやっているものを、黴菌をばら撒く可能性があることをやるっていうのは、昔のご先祖さまに対しておかしいような気がするんですね。

今野：幸せのための[行事]。

高井：そうですね。僕らは無病息災・五穀豊穰を祈願しているもんですからね。

丸山：貴重なお話をありがとうございます。私は、東栄町の花祭を一度だけ見学させていただいたことがあるのですが、高井さんご自身は何歳から花祭に参加なさっていますか。

高井：私は10歳です。

丸山：では10歳の時に、花笠からですか。

高井：その時は人が多かったものですから、私は三つ舞の盆から始めたんです。その後花笠をやって。



女郎（おかめ）の舞（平成31年1月2日）

た。できる舞もないから、味噌を塗る摺りこぎを、おかめというか、女郎というものをやらせてもらっています。女郎とは言いますが、味噌塗るのは岩戸の舞といって、私は天照大神の化身だと、一番格が高いからと、周りにおだてられてやっています。

<中略>

高井：私は豊橋の方に出ている、Uターンなんですわ。私の兄は長男でずっと地元でやっていたのですが、私は帰ってきて、私の祖父が笛を吹いていたから、舞をやらずに笛だけ吹いていけばいいかなと思っていたら、仕事で手を落としちゃって、笛を吹けなくなりました。保存会におっても仕方ないなと思って、辞めると言ったのですが、その時の会長が「おれ」といい、ずっと会計をやっていました。

丸山：名古屋市博物館でやった2013年の展覧会の時に<sup>31</sup>、花祭のデジタルアーカイブというのが打ち出されていたんですが、それはどうなったのでしょうか。

高井：僕の考えですが、これは恐らく、尾林さんがもともになって、前に花祭で世界遺産の登録をするということが1回あったのですが、それはえらいということで、今年の初めに神楽というくくりで世界遺産登録をしたいという話があって、私もサインをしました。津具の花祭保存会も協力しますと。こちらの方の元締めでやってもらうという話は聞いています。それからは選挙もあって忙しかったのかな。

丸山：そういう方向で話が進んでいる・・・。

高井：神楽として世界遺産登録をさせていただきたいから、ご協力下さいねということで。今年の初めじゃないかな。年度始めの4月ぐらいだったと思うんですわ。

今野：いまの話の続きなのですが、猿田彦や素戔鳴尊が入ってくるというのは津具の特徴かなと思うのですが、中設楽の場合は神道花と明瞭に言われて、切り紙が真白になっていますけど、津具の花祭は神道花には分類されないんですか。

高井：うちの方は白と5色使っているんです。

今野：それは仏教の頃の名残かなと思うんですが。

高井：僕らが聞いているのは、青龍・白虎・朱雀・玄武。黄色は麒麟ということで、釜を意味するんですね。＜中略＞昔は色紙で黒がないということで、うちは黒の代わりに紫を使っています。それが東西南北ですね。

今野：仏教ということではなくて、また別な位置付けで考えられていると。

高井：いつから出たのか知らんけど。猿田彦やなんかはお面ですね。うちでは榊が猿田彦です。榊が一番重んじているのは、百姓ですので、土の神です。髭のないのが榊とよく解釈されるが、それは古榊（ふるざかき）という言い方をするんですね。なかなか古榊という言い方をするところはないんですが。

今野：聞いたことないですね。

高井：うちの方は、古榊は髭が生えてない方なのです。髭が生えていた方が貫禄あるんですが。また鼻が高い方がくらいが高いということを聞いています。しずめは天狗ですが、「しずめ様」という言い方をしています。鼻＝位だということで、獅子や何かは一番低いと、僕らは聞いていました。

中西：東栄は集落ごとに花祭があって。津具の方は上津具と下津具と2つに分かれていたこともありますが、花祭は一貫して一緒にやられていたのですか。

高井：基本的に部落です。

---

<sup>31</sup> 『奥三河のくらしと花祭・田楽』（名古屋市博物館、平成25年）。





山見鬼（左）と白鬼（右）（平成31年1月2日）

今野：花祭は下津具村が起源です。

高井：下津具村・上津具村ですね。その前は溜淵村というのがあって、今でも溜淵という地名が残っているのですが。私の曾祖父が禰宜をやっていて、その時にはそれを全部仕切っていたと聞いたことがある。僕らの頃のは津具だったんですが、下津具、その中でも溜淵の近くの下津具とか、その弟とかそういう括りでした。いまの三区になりますが、そこが中心となって。いまでもそうですね。

中西：市町村合併は、特に影響がなかったのでしょうか。

高井：だんだん寄付が少なくなるのが心配だと思います。バブルの時期には、保存会は県から、毎年30万円ぐらい寄付金をもらっていました。やっぱりそういう時は、今度はあれをやろう、これをやろうと、前向きになれました。しかしだんだんもう。

一番ネックになるのは舞子ですね、これから先。やっぱり子供がいないと花祭は潰れます。いくら大人がいても、伝承する人間がいないと、子供の舞子がいないと。大人だけでやると、そうすると4、5年でおそらくダメになってしまうでしょう。子供に舞を教えて、子供が大人になってまた伝えていくというのが基本でしょう。僕は教える時には、足一步、半分でも違ったらまずいです。扇の持ち方、返し方、頭の位置、そういったことは、子供の時じゃないと言うことを聞いてくれないです。高校生になって、「扇の持ち方こうしろ」と言っても、「あー」と言うだけ。小さい頃から「三つ子の魂[百まで]」で教えていくのが、昔から理にかなったことだと思いますね。

丸山：大体何歳ぐらいから始めるんですか。

高井：早くは5歳から。小学校2、3年生ぐらいからの方が、指示をしても分かってくれる。4、5歳だと、着せられて、七五三に来ているみたい。でも絶対数が少ない。やりたいって人は多いと思います。一時は津具保育園の園長さんが力を入れてくれて、小さい時からやらせれば良いということで、全員に花祭を教えたんですね。本楽とは別なんですけど、お遊戯として取り入れて、「いーち、にーい、さーん、ひらいて、はい、テホへ、テホへ」って。そういうのをやったんですが、その時はそのままやる人も多かったですね。いま考えてみれば、先見の明があったんだなと<sup>32</sup>。

丸山：いまは、そういうことはやってはいないのですか。

高井：保育園自体が統合して津具保育園になって。津具保育園は、園長さんが自分で開いた保育園だったから、何とでもできたが、花祭に関しても関心があって、亡くな

<sup>32</sup> 『津具村誌』（平成12年）、500頁。



前の年までは寄付も頂いていました。僕らにとっては有り難かったです。衣装まで作ってくれて、いまでも置いてあります。色んな方に助けられていまあるんですが、これから先はなかなか大変、うちだけではないですが。

井戸：UターンではなくIターンで移住されて来る方は、花祭を担当されている地区にはいらっしゃるんですか。

高井：います。

井戸：そういう方は花祭に参加することに関しては、どういう状況ですか。

高井：逆にIターンの人の方が、お付き合いがいい。田舎に入ればこういうもんだと言うことで、逆にやってくれていますね。＜中略＞やっぱり興味がある方は見えますし、他所から来られた人の方が、僕らよりも真剣じゃないかな。「津具どっとこい」という移住の活動をしているところがありまして、私の同級生なのですが。その「どっとこい」でも、10何軒来ているんじゃないかな。古屋に入ってきて、できればこっちに夫婦で来てもらって、子供を産んで頂いて、増やすということで。就職先もなるべく「どっとこい」で探しましょうと。ただ先は分からないから、その方たちがずっと子供が大きくなるまでいるかということ、分からない。ただこの田舎のなかでは、こういうことやって騒いで楽しんでいたんだよということに、興味を持ってもらえれば、僕らは嬉しいんです。花祭好き同士で良いですわね。そういう方が意外と多いですよ。

井戸：他所から来られた方も花祭に参加できるのは、以前からなのか、過疎化が進んだからなのか、どうでしょうか。

高井：津具の花祭はオープンです。先先代の会長からずっと。女の子もオープン。まずは子供を大事にしろが基本。そういうことは一切わだかまり無く、やりたい人には誰でもやらせればいい。毎年小林から来る人が言っていました、小林は結構格式が高いので、「いいね、津具は。舞をしとって、子供がこっちで騒いでいて、怒られん。こんなことはありえんですよ」と。子供がいなくて次の時代はないと思っていて、鞭よりも飴の方が多いかもしれんけど。ただ[それでも]子供がいなくなってきたから[困っています]。

井戸：他の祭りに関してもそうですか。

高井：全てそうですね。例えば八幡神社で子供神輿というのが出ていたのが、人数が足りなくてできなくなった。それでお盆の15日なら何とかあるというのが、だんだん減って減って減って、子供がおらんで大人がやるかとなって、それぐらいだったらやめた方がいいということになりました。盆踊もそうです。盆踊は大人がやるものですが、子供も夜店に行って何かを買うというものだったのに、最近はそういう風景がないし、子供が行かなければ大人も行かない。いまはコロナでやっていないですが。[子供の数は]もう10分の1、もっと少なくなったんじゃないかな。あれ[盆踊]は県道でやってたから、交通規制の問題があって、昔からちょっと言われていた。寂しい話ばかりで申し訳ありませんが、それが実情でございます。

今野：下津具で行われている祭礼ですが、花祭以外では盆踊もあるということですか。



インタビュー参加者：左より高橋、井戸、丸山、中西、高井、柴田、野村、金田の各氏（今野撮影）

高井：津具の盆踊。

今野：花祭とは別の保存会があるということですか。

高井：そうですね。

今野：高井様がなさっているのが、花祭の保存会？

高井：旧の津具村の時に、村のなかで外貨を稼がないかん、よそから来てもらわないかん、有名にせないかんと。花祭は昔からあったのですが、盆踊も下津具と上津具と共同でやとつたらしい。上津具の県道のなかで踊るようになって、その頃が一番賑わっていたんです。下は花

祭があるから、上は盆踊[を担当する]ということで、分けてやっていました。観光協会が無くなった時に、これから先どうするねとなって、下の保存会は花祭を守ったものの、上の盆踊はやる人がおらんということで、止まってしまっています。その後コロナになったので、今後どうなるのか、盆踊は分かりません。

## おわりに

以上の3つのインタビューの枠内では、次の点が指摘できるように思われる。

- (1) 花祭は、財政的にはまだ危機に陥ってはいない。花見舞が十分でないことがあるにせよ、現状でも収支のやりくりはできている。もっともそれは、役所や民間財団の補助金に支えられてのことで、今後もそうした援助が継続するかどうかは分からない。集落が自力で祭礼を継続するためには、花見舞による増収が必要である。それは結局のところ、参観者の心がけの



「花祭展：花祭のある暮らし」（令和4年1月7日・於東栄町花祭会館）



花祭展で展示された宿花（大正2年古戸）の写真（令和4年1月7日）

問題でもある。

(2) 花祭は、人材的にすでに相当な危機に陥っている。かつて存在した花祭の人的制限（宮人の世襲や惣領息子のみの担当など）や精進潔斎の記憶は、もはや薄れている。Iターンで、祭礼に理解のある移住者を迎える場合もある。だがそれでも、高齢化の進行が祭礼の人的基盤の縮小をもたらしている。また誰が何をするかについては、自由化しつつもなお一定の規則があって、男女の役割分担も緩やかに残っている。外部の人的

援助は求められているが、花祭は飽くまで集落構成員の祭礼であり、部外者があらゆることを担当できるわけではなく、準備や接待に活動領域が限られている。

(3) コロナ危機は、祭礼を支える人的つながりを希薄化させつつある。花祭は大変な労力を要するが、自分たちのものは格別だという矜持を有する熱心な保存会員が、幾世代にわたり慣習を繰り返し実践し、継承することで、幾多の変遷を経つつも維持されてきた。だが数年にわたり、人々の集まり自体が問題視されるというのは、これまでなかった事態である。コロナ危機が長引き、実践の場の欠如が続くならば、更なる花祭の休止は避けられないだろう。完全な停止を回避するために、表向きは中止を宣言して外部参観者の来訪を断り、集落内部で一部の行事を実施する、という手法が模索される場合もある<sup>33</sup>。その場合は、外部者はむしろコロナ危機下では、無理に参観をせず遠くから見守る方が、祭礼の存続を助けることになるのかもしれない。しかしそれは、主宰者にも参観者にも苦渋の選択であろう。コロナ危機は、以前から進行していた個人主義化の傾向を一段と加速させ、祭礼のみならず、社会の在り方そのものを根本的に変えていく契機となるに違いない。

(このはじめ／愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻教授)

---

<sup>33</sup> 全か無かではなく、可能な範囲で実施を模索するという、コロナ危機下での祭礼の在り方は、先行研究でも指摘されている（中川智絵「コロナ禍における祭礼の記録—大瀧神社・岡太神社の春祭り—」、『リサーチ福井』第3号（令和3年）、21-26頁。田井静明「コロナ禍、変わる私たちの暮らしと香川県の祭礼」、『香川の民俗』第82号（令和3年）、8-13頁。小林多寿子／庄子諒「コロナ禍のフィールドワーク：福島県南相馬市における相馬野馬追調査に取り組む一橋大学社会学部小林ゼミナールの場合」、『日本オーラル・ヒストリー研究』第17号（令和3年）、9-20頁）。